

子供の漁・狩

著  
渡辺聰



## まえがき

「子供の漁・狩獵」これが良い。これでこそ神田に来た甲斐があるというのだ。本屋街に「子供の遊びを書いた本」は無いか?と探しに来た。古書センターで紹介された子供の遊びの本専門店も訪ねた。今の時代、インターネットで調べれば「懐かしい昔の遊び」についてイラストを含め沢山説明が出てくる。しかしいずれもおとなしい遊びを書く資料で生々しい遊びについては書いたものが無いように見受けられる。

今住む熊谷市、男の子が集まりさえすれば、すぐに電子ゲーム中心の遊びである。しかも殺戮のコンピュータゲーム遊びに夢中で有る。結果として想像力の欠如、正常な闘争心の欠如となるような気がしてならない。遊びから得た夢が実現しない人の世で、弱気で失望し、直ぐに死を選ぶのではないかも。ゲームソフトによる遊びは時代の変化で仕方ない。小学校の授業にある「昔の遊びの伝承」授業程度でサバイバルを体験できるはずも無い。毎日塾通いで時間を過ごす子供たち。ひと昔前はテレビっ子と心配された子供たちだが、今はゲームソフトに感化洗脳される子供たちがいる。これが心配。

テレビさえも無い我々の時代の子供たちはなんと言われていたのであろう。  
知らない。戦後つ子だつたかなー。

子供時代に体験をしたいいろいろな遊びは、一度か二度の体験である。毎日同じ事を繰り返して遊んでいた訳ではない。しかし鮮明に覚えている。不思議なものだな♪ その遊びの再現は自由自在である。それにどんな価値があつたであろう?とは思うが。だが自立し、人生の後半を過ごす今、精神的な面を含めて生活の糧を得る手段になつてているようにも思う。子供時代に経験した遊びの種類の豊富さが、アイティアの豊富さに繋がっていると思う。これも今の塾通いと同じで遊びの塾通い。生物学の塾通いみたいなものだ。そのような意味で考えてみれば、よく勉強したんだ、遊びで。

「子供の漁・狩獵」なる本を書こうか:そのような学びの本が有つても良いだろう。熱き血潮を思い出して、書き残せ。子供たちの熱き血潮が涌き出るよう書き残せ。町育ちの子が経験していない、俺なら書ける事柄であろう。そんな思いである。

終戦直後、昭和二十三、三十年頃の遊びである。明るい雰囲気であった。戦後の暗い雰囲気が報ぜられるが、私の育つた所では、そんなことは無かつ

たように思える。明るい夏の日差し、道路の「イナゴ」と言つた熱い砂の上を裸足になつて、熱さを感じ取ろうとした日々。春の嵐に、吹き飛ばされないよう風に向かつて両手広げ、思い切り吸い込んだがすがしい記憶が残る。田原總一朗氏が「日本の戦後」講談社、の中で書いている。「町は明るく華やいでいるように思えた。素直に言つて理屈無く開放感を覚えた」と。まさに明るかつた子供時代であつた。

私を可愛がつてくれていた、長兵衛どん宅に遊びに行つていたが、そこに文学全集の本が有り、坊っちゃん、路傍の石、たけくらべなどはそこで読んだ。小学生の頃だから、本好きだったのかも知れない。その隣がオコヤさんの家で、彼は三年ほど上であつた。縁側で将棋をして遊んでもらつた。上がり込んで菓子などを頂く。その向かいは孝三郎の家。一級年下の友であつた。よく私の妹が苛められていたな。兄貴ぶつて守つたりしてた。この子たちが仲間で、メンコ、メン棒、鬼ごっこ、ビー玉、コマ回しなど遊びの相手である。どちらかと言えば自分は何時も負けていた方であつたが。みんな、今のように塾に通つていた訳ではない。算盤や習字の塾だつて妹の時代からだ。妹や弟の面倒は見させられたが、田んぼや林を駆けずり回つていた時間の方

が長い。

終戦時は三歳だったから、小学校入学時は戦後四年、卒業時は戦後十年である。すなわち記録はこの頃の遊びや手伝いを含めた子供時代の活動の様子だ。中学生になると、まるで遊びが変わる。小学生の頃の遊びは、中学生になつてクラブ活動が始まるから廃れてしまつたのか、継続していたのか、記憶に無い。弟や妹たちに聞いてもはつきりしない。俺の時代で、ほんの二、三年の差で遊びが大きく変わったのかかもしれない。何があつたんだろう。

大きな過渡期だったかも。高学年の頃、石灰空素やホリドールなどと農薬散布が流行し、田んぼでの魚捕りはできなくなつた。これも遊びの変わった大きな原因かも知れぬ。高校時代になると一宮川での釣りや勝浦港でのキンブ、投げ竿もあって様変わりだ。釣りに出かける事が楽しく、海へと場所を変えて活動範囲が広がつてゐる。この時代は子供の漁には似つかわしくない。

見えない海を予想できるか？ オリンピックのサーフィン場を作るとか、金の臭いがブンブンとする。失われ行く「ふるさと」の原因である。つまらなくなつた。貝を採るのも禁止。浜辺に駐車するのも有料。すべては利権者の物だと言う。釣りをするにも金、子供が遊ぶにも金、いったい自由な海は何

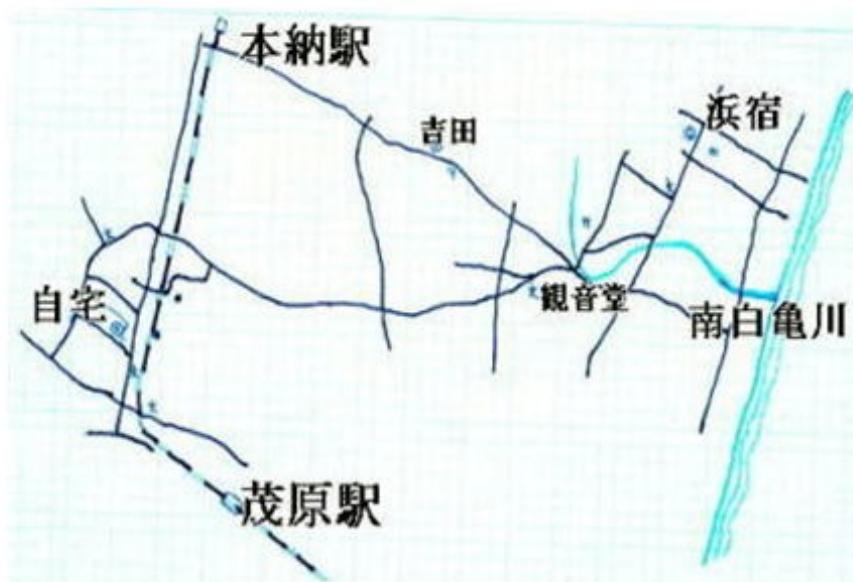
処に行つた。人が浜辺を壊している。貝も魚も寄り付かなくなる。人も寄り付かなくなる。そのうちに張り巡らされた防波堤も波で壊される。その時こそ自由な浜辺が戻つてゐるか。

昭和三十年頃の九十九里浜の様子は「写真集 九十九里浜」に小畠与四郎が残してくれている。追加して浜の様子を書こう。地引き網をする船があちらこちらの海岸に引き上げられていた。まさに引き上げられていた。船を出すのに都合良いところの目印に鳥居が建てられている。ミオ（水豚）と言う。鳥居とその浜に向かつた道筋に、船を波に乗せ海に押し出したり引き上げたりするため、コールタールを塗った滑り台を並べる。トップレスのおばちゃん達が腰に引き網をつけ、上がつてくる船を引く。船上には、ブラブラしないようおちんちんを腰紐に結んだ親父達がいる。皆激しく叫びながら、打ち寄せる波に合わせて船を引く。地引き網の引き手は船が上がる時刻になると鐘が鳴りわたり、それを合図に集まつて来る。その手伝いの引き手と共にかけ声を合わせて網を引く。主力の網は桶に入れられ運ばれて行く。一部の異種の魚は引き手に分ける。子供達は迷子の魚を探つて食べたり、ヨブと言つた水溜まりで遊ぶ。そんな風景が思い出される。

## 一・最初に

子供の頃の行動範囲を地図にしてみた。交通機関を利用した事はほとんど無い。覚えているのは、時に母親の実家がある浜宿に行くのに、茂原から本納まで房総東線、本納から観音堂まで小湊バスを利用した事。自宅から茂原駅までと、観音堂から浜宿までのかなりの距離を歩かねばならない。だから自転車で行くのが当たり前であった。キロ数という距離感はなく、ただ通り過ぎる場所の記憶のみで自転車をこいだ。

夏休みの行動範囲は母親の実家を中心にして海岸、南白亜川、実家の裏方にあるおばさんの実家、そして寺や墓が行動範囲であった。姉が「浜宿の叔父さんが描いたカンナの画を持っている」と言う。言われて見れば思い出した。鶴居に掛かっていた。それに東郷大将、もう一人軍人の写真、昭和天皇、戦死した叔父さんの写真も。槍が一本かけてあつたなー。満州から叔父さんが引き揚げて



来て、一時期まだ実家に居り、縁側でアリランの歌を教えてくれた記憶あり。その後直ぐに、高師の線路脇に家を建て、嫁さんを貰つた。従兄弟が六年下だから戦後二年であつたはず、開拓団時代や戦争の話は全くしない。ただアリランの歌を教えてくれただけである。



住処の周囲の行動は歩きのみである。近くに同級生はない。同級生の家も学校以上に遠く、行つたことはない。家の周囲、お宮、天神様の周囲、我が家(田んぼ)のある周囲が行動範囲であった。下級生か上級生が遊び相手である。少し遠い範囲といえば花見に道表山に行くか、釣りに豊田川に行く範囲であった。

ご近所は先に書いた、長兵衛どん、その隣がオコヤさんの家、その

向かいは孝三郎の家。天神様には祭りの時にしか行っていない。圧倒的に家の前庭、お隣さん、田んぼや南側の小川が行動範囲である。夏の道路は砂が粉状（イナゴと称した）になつて、足が焼ける。この焼けた砂、イナゴの感触は忘れられないなー。履き物は靴ではなく、下駄であつたり、雪駄であつたので。その砂を集め、道路上で砂遊びである。磁石をイナゴの中に引き回し、砂鉄を取るなどしていた。採った砂鉄はどうしたろう？紙の上に磁力線の絵模様をつける程度の楽しみだったが。

近所の子供たちはこちらから遊びに行かねば集まらない。必然的に一人遊びだつたか、弟との遊びだつたはずだ。姉や妹と遊んだ記憶が無い。弟とはビー玉位か。家中や庭で遊んだくらい。お守りはした、というかさせられた。姉が手伝いを逃げて母親に追い回されていた記憶もある。兄弟愛なんてあつたであろうか？お正月に歌留多や双六、将棋などは弟、姉妹でやつたかも。年が離れ過ぎていたせいか？多くは一人で遊び歩いた記憶だ。

庭であるが軒下が庭の始まり、瓦屋根から落ちる雨垂れで削ぎ取られ、雨の時は小さな流れができる。長靴で入り込みピチャッピチャと遊ぶ。庭はメンコやビー玉の遊び場所であるが、筵を敷き朝を干したり豆を干す場所で



もある。まして農繁期には何枚も広げた筵の上に稲こぎ機や脱穀機を置いての作業場所である。にわとりの遊び場所であり、もちろん一部に植木もあつたし柿や梅等の木も植えてあつた。広いのだ。大槻の家には家の中にも土間があつた。土間とは石灰を撒いて踏み固めたもの。長年踏み固めていると非常に堅くなる。玄関を入つた部屋への上がり口が、或いは別棟の小屋の中、釜竈の前や風呂釜の前などがこの土間である。そこに筵を敷いて座り、焚き火をしたり風呂を沸かしたり、ご飯を炊いたりする。雨の日はここで縄を編つたり、収穫物の置き場であつたり、使い道が多様であった。家の中の庭、楽しい場所である。

家の土間の話が出てきたついでに縁の下の話である。すなわち廊下や座敷の下は空間で、子供は窟めば入れた。大槻は竹竿や長い木の保管場所。梯子などもそこに廊下側から差し込むようにして保管してあつた。この縁の下に

ボールが転がり込んだり、遊んでいたコマが飛び込んだりして、それを取るために潜り込んだ。時にそこに思いがけない物を見つけたり、蛇なども逃げ込んだりしている。

竈も各家にある。釜や鍋を置いてご飯や煮物を作っていたから、手伝いでこれらも使いこなしていた。冬の夕飯作りは竈の前に座り込む。暖かいし、つまり食いはできるし楽しいものであつた。風呂も同様、木製の風呂桶で、沸かす薪を加えながら火に当たり、煙を避けながら芋を放り込む。焼き芋である。何時の頃か井戸にポンプがついて水道になつた。町の水道ではない。自分の家の井戸水である。井戸は浅く、時々入つて底の砂を掻き出す。ボウフラを食べさせるために鯉を井戸に放していく。そういう意味では汚かつたのだなー。井戸から「つるべ」で汲んだ水をガブガブと飲む。井戸の縁に置いたブリキ製のバケツを傾け、直接口を当てるから金属味を感じながらである。借地であった。母親の死後土地を返す時にこの井戸を埋めた。井戸の神様に祈りを捧げた後に。地主の指示である。

地主はお隣さんである。その家は入り口から庭までの小道「じょうほ」が長く、脇にカラタチの生け垣、反対側はニッキの木と楓の木、茶の木の生け

垣であつた。じょうほ、その地面に絵を描いたりビー玉をして遊ぶ。カラタチの青い実が記憶に残る。ニッキの根を掘つたり、茶の木に絡むカラスウリを探つたり。さらに庭に入ると左手に池があり、ザリガニ釣りや食用蛙を釣るなども。池の端には豆柿の木があつた。この柿の実が秋になり熟れると美味しいので採りたくなる。よく怒られたなー。「ケチツ」、ではない、柿の木は折れやすいのだ。それを心配した隣のお爺ちゃんだ。さらに甘茶の木がある。葉を探り、ノートの間に挟んで押し葉にした。これは非常に甘くなる。庭の奥にはオニユリが群生していた。南側の通りに面したところにコの字に曲がった松の木があつた。腰かけ夕陽を眺めていたある時、搖すついたら女の人がキャーッと悲鳴をあげて逃げ出した。夕刻だからお化けと間違つたらしい。このお爺ちゃんは珍しい木を植えるのが好きだったようだ。

この家に上がり込んだ事は何回もない。これに引き替え、向かいの家には夕飯を行つたり、お泊まりをしたり頻繁に出入りしている。親しくしているお婆ちゃんがいた。しかしここの庭といえど横の木や紅葉であり、実のなる木は夏みかんの木程度、遊び場所も無く面白くない。もっぱら夕刻以降の遊び場であつた。子供のころ使い分けていたんだ。遊び場所の説明が家

の解説になつてしまつた。

## 二・学校帰りの途中は

当時は通学路なんて決まっていなかつたから、あつちの道こつちの道、いろいろな道を帰つた。だから「道草を食わないようにしてよ」と児童会で決まりたりしてた。道草で四つ葉のクローバーを探す。通り道の草を結んで、誰かが引っかけて転ぶのを予想し楽しむ：イタヅラである。ツバナを抜いて甘味を噛む。スカンボの酸っぱさを味わう。さらに垣根にからむ乳花のうす淡い甘さの蜜を吸う。ツツジの花も摘んで吸うと甘い蜜の味がした。麦のクロンボ（病気になつた麦の穂）を抜いて麦笛を鳴らす。タンボボだつて花の茎は筒状で良い草笛になつた。小川に放り込まれている竹筒を引き上げてみる。これもイタヅラ。

小学校の裏山、校舎の裏手に洞穴があつた。結構大きくて立つて入れる。粘土質で、入り口は雨が降ると滑つて入れない。が、粘土を探つて粘土遊びができた。一番奥迄は入つた事が無かつたよう思う。蝙蝠がいてこれを捕まえ、蝙蝠の温もりを遊ぶ。その裏山は登り道があり、理科の授業か図画の

## コウモリ



授業であつたか、その山で植物の観察やら  
絵を描く事やらした記憶がある。縦断する  
と渋谷方面まで続いて、遠回りして帰つて  
來たりしたようだ。

小学校は二段になつており、丘の上が三、  
四年生と中学生、下が一、二年生と五、六  
年生の校舎である。上の校庭には小さい松  
山と池がある。庭中央に松の木があり、そ  
の松の木が馬乗り遊びの支柱。下の校庭は  
広く、周りは桜の木で囲われ運動会が行わ  
れた。また中学生の野球場がある。

学校では相撲や陣取りが遊びの主であつたよ  
うな気がするが、授業でも池の  
生物ヤゴを探したり、力エルの解剖、ザルの工  
作、模型飛行機の工作、裏山  
の探索、馬乗り、騎馬戦等を覚えて  
いる。夏休みのクロンボ大会は恒例だ。  
工作の宿題は何を作つたか覚えが無い。絵日記も最後の三日間で済まし  
たり。昆虫採集の宿題もあつたが貝殻の収集、蝶やトンボの採取くらいか、蝶には  
あまり興味無かつた。注射器とアルコールなどがセットになつた標本作りの

学校帰りの途中に豊田川が流れる。水門もあり良い釣り場所である。豊田川は茂原発祥の歴史に出てくる、古くからある川だ。もちろんかなり後になって知った事。昔、藤原氏の時代、恩賞として上総一ノ宮川からこの支流豊田川迄を領地としてもらい受け、一宮に本拠地を置いた藤原一族が発祥の元の様だ。原っぱであったので茂原と言うようだ。開墾し領地を広げて来た。自分のルーツも興味のあるところだが、父方は住む豊田村に近く大綱寄りの吉田村、母方は九十九里浜に近い浜宿。浜宿は昔の時代の大津波で海岸から五キロほど奥に移動したんだと推測する。それが浜宿上の台。九十九里の住民の元は紀伊から魚を求めて移り住んだ人達が原点の様だ。俺はやはり弥生人かなー。それも作家、五木寛之の言うマージナルマンか？

道具が売られていたのだが、注射器を使うのが面白くて。

冬、大雪の時があった。学校迄、雪の中を一時間ほどかかって到着。誰もいない。中には、わか子という子と二人しか来ない。當時は休みの連絡網など無かつたし、電話も無かつたから休校を知らない。雪がさらには積もり、さすがに母親が迎えに来た。氷つている朝は田んぼの中をショートカットして突つ切る。今のように灌漑が進んでいないから田んぼには冬も水があり、春は用水へ子供にとつては川で



### 三・遊び各種

#### コマ

コマ遊びは近所の子たちが集まって遊んだ。学校でも遊んだな。コマ綱の元に付いている「はたき」を使って、回す時間の長さを競うのはおとなしい遊び。多くは叩き付けと称して、回っている相手のコマに自分のコマをぶつけて弾き飛ばし、自分のコマが回っていればが勝ち。相手のコマがぶつつけられても回っている場合は、お互いに「はたき」ではたいて回転の勢いをつける。長く回っている方が勝ち。弾き飛んで人にぶつかったりするので学校の児童会で、「叩き付けの遊び禁止」が毎回取り上げられた。



その遊びに勝つために、コマは饅頭型を買いやめる。心棒を抜いて、ドングリの木の小枝で自作した心棒に取り替える。中太にして折れにくくする。クチナシの実で饅頭の部分を黄色に塗る。強そうに見せる為である。コマを回すコマ綱も、麻やフラン

メンコ

---

クスという植物の葉を叩いて採つた纖維を使い、自分の好みの長さ、太さに糺う。叩きつけて回すのに都合の良い長さ、太さと柔らかさにである。巻はじめの細い部分には布の切り裂いたものと一緒に糺う。こうするとコマにうまく、早く巻くことが出来た。遊ぶにつれ饅頭ゴマは傷だらけになる。これが戦績を物語る。市販の色つきゴマは軽くて弱いのでペケであった。ベーゴマは中学生や高学年の遊びであつたような気がする。

### メンコ（面子）

丸いメンコと四角いカード状の物があつた。描かれている絵は相撲取りや歌舞伎役者、俳優のプロマイドなど。カード状の物は手で弾いてひっくり返す遊びに使う。主として丸いメンコが戦いの道具である。戦いの場所は土の上で、凸凹の場所あり、濡れた場所あり、坂になつている場所あり、木屑等の障害物ありで、それが遊びを更に面白くしている。場所は何処でも良かつたので友の家の陽当たりの良い庭が舞台であつたんだ。相手のメンコを自分のメンコでひっくり返して遊ぶ。相手のメンコ近く、地面にあるように叩きつける。相手の物がひっくり返れば自分の物になる。ひっくり返らず、自

## メン棒（釘刺し遊び）

---

分のメンコが木の枝など障害物にひつかかれば、相手にとつて都合が良い。

こんな遊びも。庭に直径三十センチ程度の円を描き、円内に入れたメンコを、他のメンコで弾き出す。その為にメンコの端を折り曲げて相手のメンコを出しやすくする。あるいはあおるよう叩きつけてひっくり返す。これはメンコを故意に湿らせて重くしたりした。こうすると叩きつけやすくなるし、ひっくり返りにくくなる。時には「出た」の、「出ない」の言い合いになる。判定も皆ですので相談や交渉力も付いたはずだ。強い子は箱の中に何百枚も戦利品として持っていた。

### メン棒（釘刺し遊び）

この遊びも地面上に、三寸釘、五寸釘など太い釘を叩きつけるようにして刺して遊ぶ。地面が固すぎれば刺さらない、柔らかすぎれば深く入り込んでしまう。適当な所を選び数人で交互に刺して遊ぶ。相手の釘を弾き飛ばして刺さったら、はじき飛ばした釘をせしめる。また相手の釘が倒れても良い。自分の釘が刺さらず、倒れてしまつた場合はそのままにしておき、次の相手はその釘に接するように刺して弾き飛ばせば良い。倒れた釘は格好の餌食とい



う訳である。強い子は戦利品としてたくさんの釘を持っていた。これも危険な遊びとして児童会で禁止を食らう遊びだ。また刺した釘との間を直線で結び相手の直線を閉じ込めるやり方もあった。これは釘の取りっこではない。

### 将棋やかるた

家に将棋盤が有った。大概の家にも有つたので、近所の友の家の縁側でも遊んだ。子供用に軍隊将棋というものが売られていて、紙の将棋盤で遊ぶ。オセロはまだ無かつたな。双六やいろは歌留多は「小学一年生」という月刊誌に付録として付いていた。トランプや花札は友人の家にありそこで覚えた。中学生を真似て覚えたが子供には難しかつたようだ。賭の対象のイメージもあつて遠ざけていたようでもある。

将棋。詰め将棋はもちろんのこと、はさみ将棋、積み木崩しなど弟、姉妹と遊ぶことが多い。相手のいない時の将棋は、「家の光」という雑誌や新聞の片隅に詰め将棋の問題が掲載されていてそれを楽しんだ。囲碁は近くに碁盤のある友の家庭が無く触れる機会が無かつたな。大学時代の友人に囲碁をたしなむ人多いので、当時は当たり前の遊びの一つであつたろう。軍隊将棋をは



つきりと覚えている訳ではないが、調べると軍人将棋と言い、いろんな種類があつたようだ。駒はタンク、飛行機、大将、少将、歩兵等々。動かし方は忘れてしまつた。

折り紙や塗り絵は売られていた。先の雑誌「小学何年生」にも付録として付いていた。鶴くらいは折れたがお手玉やおはじき、あやとりと同様に女の子の遊び。せいぜい新聞紙やノートの切れ端で兜を作る、三角に折つて降り下ろしてパチンと鳴らす程度であつたと思う。お手玉は姉がよくやっていた。自分はむしろお手玉にする中身、数珠玉を採取にゆく。このほうが面白く思つた。正式名は知らない。調べると数珠玉という名の福井の植物のようだ（ウイキペディア）

### ビー玉

透明な緑色の大中小のガラス玉が主で他にカラフルなもの、内部に色が閉じ込められたきれいなビー玉などもあつた。色とりどりである。遊び方はやはりビー玉の取りっこである。庭に円を描き、その中に各自ビー玉を入れる。遊ぶ人数により二個ずつとか三個ずつとか決める。四、五メートル離れたと

この手の遊びについて上手がいる。十年以上年上であるから戦前の遊びになる。小沢昭一さんと神崎宣武さんの対談形式「道楽三昧遊び続けて八十年」(岩波新書)の前半に詳しい。所変われば遊び方も変わる物だ。しかし似たような遊びで、読んでいると「確かにそういう遊び方があった」と思い起こす事多い。今の子供との比較した感想はおなじだなー。

ころに線を引き、そこから指でビー玉を弾き、円の中のビー玉を突き出す。小指を地に置き支点にして、親指と人差し指でつまみ出すようにして弾くのである。出たビー玉が自分の物になる。最初は緑色の小さなビー玉を円に入れて入るが負けてくると、カラフルな大きいビー玉を入れざるを得ない、そこが狙い目で夢中になる。

親ビー玉が突き出せる限りは連続して試みることができ。突き出せなかつたら次の人の番である。突き出ても親ビー玉が円の中に残つたら出たビー玉を円の中に戻す。上手な人は一回ですべて突き出してしまう。そしてはじめから再スタート。じやんけんで順番を決めた。

もう一つの遊び方は「ぶっつけ」とか「幅取り」と言つたか、そのような遊びもあつた。これも二、三人の遊び。最初、地面上にスタートラインを引き、そこからビー玉を適当な方向に指で弾く。次の人気がそのビー玉に向かつて弾き、ぶっつけたら取れる。あるいは手のひらサイズに近づけたら取れるという手法。幅寄せである。従つて最初の人は難しい所に弾いておく必要がある。



斜めの坂の所とか、穴の近くとかに。取られなかつた場合は次の人の順番で逆襲をする。取られた場合はスタートラインから始める。幅寄せを防ぐために転がりやすいように道筋を手で掃いたり、口で障害物を吹き飛ばしたりして。カーリングのイメージを思い出すね。

メンコにしてもメン棒、ビー玉にしても負ければ物が無くなる。負ければ泣きたくなる。新しい物を買って来なければならない。新しいメンコやビー玉は格好の標的でもある。強い子は箱の中に沢山の戦利品を持つ。弱い子は常に負けるので、強い子と遊ぶのを避け相手を選ぶようになる。

### 鬼ごっこや馬乗り

家を数軒にまたがつた広域の鬼ごっこ。鬼ごこというより広域隠れんぼと陣取りである。お隣さんの庭の中から数軒離れた家の木陰などにも及ぶ。だいたい隠れる場所は決まっていたようだが、鬼も数人いるし、隠れる方も数人だからすぐに見つかる。鬼に見つかり名を呼ばれた子は決めた木につかまり繋がつていてる。鬼のいない間に仲間が来てタッチし、捕まっていた全員が再び隠れてしまう。そのような遊び。

馬乗りも十人くらい集まるとよくやつた。中学生も加わったようであつたが大きな木を寄木に、一人が前を向き立ち、小さい子を守るようにして数人で一列の馬を作る。乗り手は走ってきて、跳び箱のごとく跳び乗る。大きい子はできるだけドスンと勢いをつけて飛び乗り、つぶそうとする。つぶされると再度馬にならねばならない。つぶされなかつたら交代である。人数が必要な遊びで学校でよくやつた遊びもある。主に昼休みの遊びだった。ドッジボールと共に押しから饅頭も昼休み定番の遊びであつた。

この変形だが二重の渦巻き状の円を地面に書いて、その筋に沿つて歩いたり急に駆けたりしてタッチして捕まる。あるいはS字状に地面に書き、出口から出てその丸円状の内部分に塊に集まっている相手の子たちを、外から手を伸ばし、円外に引き剥がして捕まる遊びなども。縄跳びなども学校の体育の時間でも行なつたのであろうが、自宅の庭でもよく実施。二重跳びは当たり前にこなし、三重跳びにも挑戦している。ひもは荒縄を探してきて自分で長さを調整していた。

# 廻揚げ

---

## 風あげ



風上げもまた冬の遊びであつた。買つた風は勿論であるが、自分で作る風が当たり前。何回も作つた。学校で工作の時間に作つた記憶もある。市販されていた風の模様は、赤く染めた両袖に中央を丸く抜き、そこに何かの絵が描いてある。たとえば金時絵とか文字とか。小型のものと中型のもの二種あつたようだ。小型を、それをまねて竹籠で骨を作り、障子紙を張り、絵の具で赤く塗る。吊り糸は二本、この吊りの張り具合が難しい。上げる角度が必要なので、風の頭の方が引っ張られるように、横から見て直角より少し小さな角度の三角になるように張る。そして重心が下に来るようヒラヒラの尾をつける。これを長くして楽しんだ。長くすれば重くなり、当然のことながら風が弱いと上がらない。長い方がヒラヒラして面白いから長くしたい。五月の節句の頃大人達が上

げ、子供たちは正月の遊びであった。

大人の作る凧は吊り糸が八本とか十二本とか大きい凧である。そのような凧は長い吊り糸の重みで弛むのでその調整も必要になる。加えてうなり音をだす弓を頭に張る。その構造を説明する。簾竹を折り曲げ弓を作る。藤蔓の皮をなめして、風を切る時に震動し、うなり音が出るように平たい弓蔓にする。凧の頭に、角度を調整して、風を切るようセットすれば、ブーレンとうなる。遠くでこの音を聞くと、誰かが凧を上げているだと判かり、見に行つたりもした。親父も凧作りが好きで、大きな凧を作り、凧絵も専門の絵師が描いた物を求め、紐も麻繩で綁う。うなりも付けて飛ばすという巣りようであつた。うまく飛ばせた記憶は無いので、親父も作る楽しみの方であつたのである。そのおかげで吊りの張り具合、新聞紙を細長く切った凧の尾の付け方、草を凧の尾の代わりにぶら下げたりなどを覚えた。

凧を卒業すると模型飛行機であった。これはお金が必要で、ある程度のお小遣いを貰う高学年になつてからである。学校でも工作の時間に、模型飛行機を飛ばした。滑空で上昇し滑空で着陸させる。上手にできるようになるにはかなり試行錯誤が必要であった。ゴム紐の工夫程度では車輪がうまく回

フラフープ、自転車乗り

---

らず、滑空がうまくゆかない。車輪や翼の部品は買って来るを得なかつたのだがとにかく夢中になつて改造をした。中学生になつてもグライダーの工作がしたくてしようがなかつた。グライダーは形が大きく高価でその金が無くとうとう手が出なかつた記憶である。スクリュウを回す船の模型が市販されていた。これを入手して組み立てる。ヨットの組み立てをしている子もいたなー。幼少時期は風呂場でぼんぼん蒸氣船である。ロウソクを灯してボイラーを加熱しベンベンと音を立てて動き回るブリキ製であつた。

### フラフープ、自転車乗り

一時的に流行つた物ではフラフープがあつた。これは小学校の高学年であつたと思う。やりすぎて腸捻転になつたという話が学校で噂になつた。同じようなリングを使う遊びは自転車のホイールを転がす遊び。なぜか自転車のホイールが入手できた。自転車も壊れやすかつたのかも知れぬ。これはかなり遠くまで転がして行つた。自転車の三角乗りをやつていた時期と重なつていたのであろう。子供自転車なぞは無かつた?時代である。あつたのかもしないが近所には持つている子はいなかつたし、三輪車を過ぎれば皆、三角



乗り、それを超えると中乗りである。したがって婦人用自転車は都合わるく、中に棒の支えのある男用自転車を使う。

三角乗りはサドルを左手で抱え、右手は右ハンドルとブレーキを持つ。左足を三角の向こうにまで差し入れ、左側のペダルを踏む。走り出したら右足を右ペダルに置き、こいでゆくのである。中乗りはサドルまで尻が届かない背丈の時に、真ん中を通る心棒をまたぎ、ここに尻を乗せてこぐ。しょっちゅうチエーンがズボンの端に引っかかり外れ、からまつた記憶である。

### 兵隊蜘蛛の戦い

蜘蛛と言えば兵隊グモ（コガネグモ・ウイキペディア）。庭の木と木の間に巣を張っている。中央に何やら、兵隊の階級章よろしく模様を編んである。その真ん中に、尻に横線の黄色の鮮やかな模様をつけた大き



な蜘蛛が威張つて張り付いている。遊びは同種の蜘蛛を捕まえて来て、勿論手で捕まえるのであるが、蜘蛛の網に放り投げ付着させる。家主は気づくと、網を前後にボラントリンのごとく振り、侵入者を振り落とそうとする。侵入者は中央に向かい家主に闇いを挑む。激しい闇いである。勝つた方は尻から蜘蛛の糸を出し、ぐるぐる巻きに捕獲してしまう。その場所に放置し、中央に戻り勝どきの雄叫びごとく、悠然と構える。ぐるぐる巻きにされた方は、そのままにしておくと食べられてしまうので蜘蛛の網から外し、ぐるぐる巻きを解いてやり、逃がしてやるなり、他の蜘蛛の網に放り投げ再び闇いに挑ませる。

庭に小さな穴が幾つも開いている。蟻の穴とは明らかに異なる。その中には虫がいた。ニラムシと称していたが正式な名前は知らない。その穴に葦の葉を差し込むと、その虫が釣れる。釣り上げる行為が面白くて穴を探し回る。家の土台の周囲には筒状の袋が土のなかに潜つてい



る。入口が土台に寄り添つて付着しているので、チチンブイブイ言いながら、それをそろーりそろりと引き抜く。その袋の底に或いは中間に蜘蛛が潜んでいて、袋を外部から押すと何やら潜んでいることがわかる。地蜘蛛と言う名か？その引き抜く行為を楽しんだ。

#### 四・飼う

親父は農協に勤め、サラリーマンであった。かつ三反百姓でもある。生き物が好きで、その趣味に付き合わせられる環境で牛や豚、にわとりを飼う。一度にたくさん飼う訳ではない。一貫性も無く、当時の流行に合わせてか？いろいろな家畜、動物を飼つた。農家へ指導のため経験しておきたかったのかも知れぬ。農家はどこでも豚や牛を飼っていたのだから。兎もヤギも経験した。にわとりは常にいた。シャモ（軍鶏）も記憶にある。この鳥は閑鶏をする目的の種で強そうな、大きく、綺麗な鳥である。それらの小屋の糞尿掃除は汚く嫌で、大変であつた。また餌に野の草を刈つてくるのである。牛が食べる量の草を刈つてくるなどは子供にとつて難儀だつた。スキやワラが好物で押し切りで細かくしてやらねばならない。大概は親父がこなしたが自

分の仕事でもあった。犬はいなかつたけれど愛犬だつたという犬皮の敷物が有つた。猫はいたな。近所には放し飼いの犬も多かつたよ。繋ないで飼いましょうという触れが回つていた。

## 野うさぎ



その中でも兎の餌を探つてくるのは楽しい。外に連れだし食べさせながら草を探る。オオバコとか馬肥やしとかタンボボが好物である。クローバーは密生していて採りやすかつた。繁殖時期になると、雄はバタリバタリと足で床を叩いてメスを狙う。子兎は可愛いものだ。山羊や牛はどうしたろう。乳を搾った記憶はない。ある程度の大きさになると売り飛ばしたのだろう。豚は二十貫豚といつて、その大きさになると肉豚として売つた。一度しか経験がない。

### にわとり

鶏小屋で飼うのだが、毎日庭に放した。ト

にわとり

---

一トトトトと呼びながら餌を撒くと集まつて来る。普段の餌は、外に放し飼いであるから虫や草をついばんでいる。時には葉を刻んで米糠を混ぜ与える。トウモロコシなどもあげた。アサリやゼンナなど貝を食べた後は、残った貝殻を金槌で碎いて、鶏小屋に放り込む。鳥の餌である。これをあげないと卵の殻が固くならない。フニャフニヤの卵ができてしまう。カルシュウム不足である。イナゴやバッタも捕まえて鶏の餌にする（長野の方ではイナゴを食べる」と聞いてそつとしたものだ：かなり後の事）。鶏小屋には止まり木を作つておく。夜間、にわとりはそこに飛び乗る。鶏小屋の隅に藁屑を置いてやるとそこに卵を産む。にわとりは餌で呼ぶとき以外に糞できず、廊下や畠の上に糞をされ追いかけ回した。あたりかまわず糞をするので鶏小屋もすぐに汚れる。（にわとりのオシツコは見た事がない。）臭い所でもある。常に臭かったなー。中に入れ必ず糞を踏みつける。入らねば卵が採れない。卵は糞が付かないよう注意深く採らねばならない。

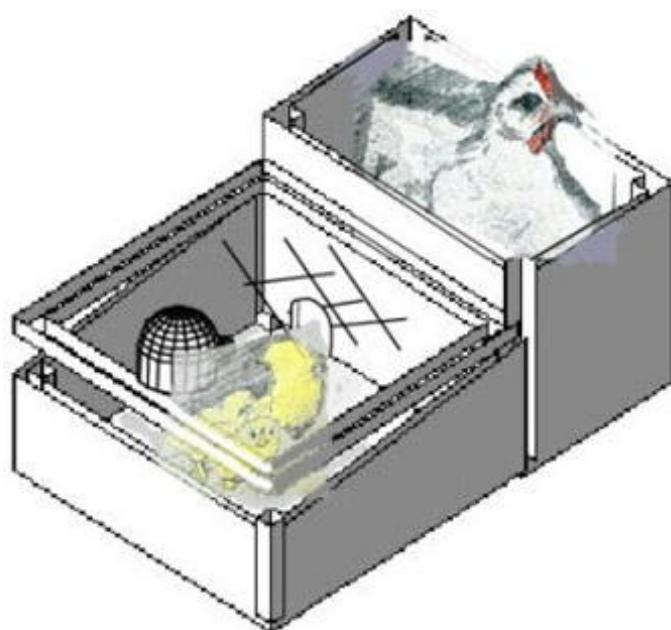
掃除も毎日はできない、と言うかしない。加えて青草や貝殻などエサを放り投げるので更に汚い。もちろん餌箱や水飲み場もあるが、鳥はバカ、其処にも糞をする。敷き藁も鳥に踏みつけられてペちゃんこになつていて、その

上に糞をしてかつまた踏みつける。抜け落ちたにわとりの羽は白く土の色に目立ち、汚さを際立てさせた。十羽程度飼っているのだから仕方ない。寝るときは止まり木だから自分達は糞に汚れない。朝早くからコケコッコー、だから昼間は外に放し飼いである。もちろん何日かに一度、掃除はするよ。鍬で平らにするのだが。しかし好物のミミズがいるのか足で掘つたりくちばしてつついて直ぐに凸凹にしてしまう。だから掃除もしにくい。取り除いた糞混じりの土は肥料にするのだ。ことさよう鳥小屋の汚さと言つたら大変なものだつた。豚小屋にしても牛小屋にしても汚かつたなー。

あるとき小屋の隅に、見えない所に巣作りしているにわとりがいた。卵をとるために、手を突っ込んだらアオダイショウが飛び出した。びっくりしたなーもー。蛇と言えば、抜け殻が小屋の鳴居や垣根に張り付いていたなー。これを採取し、足で踏みつけると駆け足が早くなるとか言つて、踏みつけたが？ちつとも早くなりやしない。家は藁屋根であつたので、台風の時など、風の強い日には屋根から蛇が落ちてきたことがある。どこかの地ではご飯釜の蓋に穴を開け、そこから首だけ出させてご飯を炊き、蛇ご飯を作るとか聞いたことがある。これは親の冗談だつたかもしれない。自転車の車輪に絡まつた

こともある。走行中にである。だから田舎道の草の生えている道は用心せねばならない。それに歩くときも誰かが、イタズラで草と草を結んである場合もあるから。これに躊躇してひっくり返る。いまのようにな車にぶつかる危険よりはまだましだけれど。この頃自動車は多くなかつたから、車の危険はほとんど記憶にない。むしろ人さらにを恐れ、車に乗せるという誘いに乗らないよう教えられていた。

おんどり「雄鳥」と一緒に飼えば有精卵ができる、めんどうり「親鳥」に卵を抱かせてヒヨコを孵化させる。ヒヨコ箱も別に用意した。これは親鳥が卵を温める場所とヒヨコが遊ぶ場所とを一緒にした箱である。親鳥のところからヒヨコが出られる程度の出入り口を作つてやる。ヒヨコの遊ぶところは、金網をつけた蓋状にする。親鳥のところは中に糞を敷いて、其処で孵化させる。暖め始めてから二十日ほどたち、親鳥の羽



の下からヒヨコが顔を出す。親鳥のところから出てきたヒヨコ達は、遊び場に置かれた餌箱をつつき、水飲みに嘴をつっこむ。このときが一番可愛い。ヒヨコの餌は柔らかいしゃくし菜を買い、刻んで与えた。寝るときは一塊になつて寝る。親鳥と一緒に何日でもない。トサカの形でオス・メスが判るようになると、雄は六十日程度で肉にしてしまう。あるいは誰かにあげてしまった。

親父が堆肥で温床を作り、その熱でヒヨコを育てた。百羽程度いたかも知れぬ。六十日雛という頃合いが売りどころである。ビニールシートで周りを覆い、開け閉めして温度調節をした。ところが六十日寸前で温度が上がり過ぎ、夜の内に雛が全部死んでしまった。開けるのを忘れた？か、あるいは今考えれば鳥インフルエンザだったか？当時はそんなこと知るよしもないのでは、仕方ない。鳥肉に仕上げた。その手伝いをして、閉口した記憶である。

まず首に包丁をいれ、逆さに吊し血抜きをする。熱湯をかけて羽をむしる。次に藁を燃やし、その炎にかざして細かい羽毛を焼く。そして手羽肉とともに肉を切り取る。内臓を取り首と胸肉を取つたと記憶している。冷蔵庫なぞ無かつたから、食べきれない。近所に配つて処分をした記憶である。内臓など

は捨ててしまつてかなり無駄な処分をしたと思う。処分する忙しさだけが記憶で、可哀想だったという意識はない。親父は残念！ということだったのだろう。

にわとりの中にはチャボと言う小さい鳥も飼つたことがある。白い鳥は卵をとる目的で、白色レグホンと言う。その頃からにわとりを庭で飼うより、小さなケージの中で飼うことが流行りだした。柵を作り、横に並べた小さな区画に囲う。一羽一羽そこに入れた。区画の底は糞が下に落ちるよう、格子状にしてある。この底も傾斜をつけて、産んだ卵が前に転がり出るようになした。その箱だな作りを手伝つた記憶がある。餌やり、卵の採取を手伝つた記憶もある。またかわいそうなにわとりの印象である。身動きが出来ない。庭遊びが出来ない。

専業養鶏農家であつた訳ではない。当時各家庭で皆、にわとりを飼つていたのだ。朝二十箇くらいの卵を採取して卵屋に売りに行く。そして小遣いにした記憶である。ちなみに卵を産まなくなつた鳥は「トヤになつた」と言つて潰して食べる。生きた鳥の血抜きはバタバタと暴れるが仕方ない。しかし肉が固くつますい。だいたい肉の固さで年を取つたにわとりか否か判別がつ

いた。

### 捕ったものを飼う

自分が主役の飼う作業では、天水桶にドジョウやフナを入れたり、緋鯉の子なども入れ飼う。水草を投げ入れ陰を作る。メダカは当たり前で自然に繁殖し、蛙は梅雨時に自然と入り込んでいた。水草の間に見え隠れするその鮒や緋鯉の影を見て楽しんだ。

### 五、栽培したものを、自分で料理する

ほとんど、自分で栽培をするという行為は記憶はない。母親がグラディオラスや百日草を庭の縁に植えていたが、自分は花を植えたりした記憶は無い。小学校でも花壇があったのであろうが記憶に無い。せいぜい親父の手伝いで椎茸の栽培くらいだ。クヌギの木を買って来た。それに専用のノミで切り欠きを堀り、椎茸菌の付いた駒を打ち込む。裏庭の琵琶の木の下が日陰で、隣家竹山との境が溝であり水が溜まっていた。湿り気もあり都合が良い。そこに立てかけ、籠を被せて椎茸が出るのを待つ。自家で食べるのには不自由し

# ご飯の釜炊き

---

なかつた。大きくなりすぎた傘状のものや、まだ丸く粘っこいものや、いろいろである。それくらいかなー。

### ご飯の釜焼き



「収穫したものを見る」は当然の行為である。その作り方を自然と覚えたのであろう。料理の方法というより単純な煮焼きの方法である。今で言えば珍味の味わい方か。みんなこの小学生時代に覚えた。青唐辛子を刻んで甘く味噌と炒めたり、青トマトの刻んだものに醤油をかけて食べるなどすればご飯が進む。これは美味しいよ。タケノコの味噌汁。真竹であつたからあく抜き作業無しである。タケノコの皮の髪を包丁の背でそぎ落として洗い、そして梅干しを三角に包み、皮が赤くなったら、その上から舐める。しょっぽくて美味しいかなー。「はじめちょろちょろ中ばつぱー、赤子泣

いても蓋取るな」というご飯の炊き方は当然のこと、卵まぶしのご飯やおにぎり、おじやも自分で作った。餅つき、機械餅、味噌作り、麹の発酵などは親父を手伝つた。そこから甘酒や豆の煮汁に干し大根を漬けたりした。梅干しを作れば、梅酢に赤漬けは必然だ。芋を蒸かして乾燥芋を作る。千切りにした大根や煎餅状に切った生姜を天日干しにする。これは乾燥途中が美味しい。自然薯芋のスリ方や細い毛のような根の取り方などなど。

寒天、小豆を煮て漉し、羊羹を作る。これは母親の仕事。バットから固形状に切り出し頬ばる。あまり甘くなく小豆の香り、懐かしい味である。にわとりの裁き方は先に書いたが、フナ、鰯など小魚のはらわたの取り方、うろこの取り方も知る。たにし（タツボと称した）や、ながらみ（貝の一種）の身のほじりだし方、茹でたザリガニの処理の仕方、甘味噌煮など。今思えばこの頃覚えた煮炊きの前処理方法が多い。フナやドジョウを煮るときの暴れる音が耳につく。

小学時代は弁当持ちであった。好きな弁当は弁当箱のご飯の上に青のりや

# 昆虫を

---



浅草のりを一面に乗せ、箸でついてのりに穴を開け、醤油をかけておく。真ん中に梅干し。おかずはナガラミの甘味噌煮。これが一番。特に冬時期には弁当を暖める設備が教室の前方にあり、暖まると弁当の匂いが漂ってくる。これが良い。嫌いな弁当はご飯の上に塩鮭を乗せた弁当。ご飯が魚臭くてダメだった。当時の弁当箱はおかず用の領域が無かつたのだ。

## 六・捕まえる

### 昆虫を

夏、道の両脇はススキや茅が生えていた。その草むらにキリギリスが鳴いている。よく絵に描かれている、麦わら帽子に半ズボンの少年の姿を思い浮かべて欲しい。まさにその格好でソーツと近づいて、いる場所を確認する。

そこに舐めてべとついたキャラメルを糸で縛り、垂らすとそれを舐めにくる。舐め始めるとなかなか逃げなく、手で捕まえる事ができた。夏の夜、部屋の裸電球にアブラゼミやカブトムシが飛んできた。カブトムシは雄同士で戦いをさせる。マッチ箱を車にして引かせるなどで遊ぶ。カミキリムシは鬚が長い。紙を切らせて遊ぶが鬚が邪魔になつて結構難しい。

蝉と言えば、好きな種類があった。ホーインチヨコチヨコ、ホーインチヨコチヨコ、チヨコインヨウ、チヨコインヨウ、ジーとか。これツクツクボウシ。力ナ力ナ力ナとヒグラシ。ヒグラシは羽が透明で綺麗な蝉であるがすぐに飛んで逃げ、なかなか採れなかつたなー。ジージーとうるさいアブラゼミ、ミンミーンとニイニイゼミこれらの蝉は当たり前すぎて面白くない。夕刻お宮の境内、杉の木を狙つたのだが。採ろうとするとオシッコをかけられるし。秋には、家の垣根になつている茶の木の中でガチャガチャと啼く、緑色のキリギリス同様の方法で捕まえる事が出来た。スーアイチヨと啼く、緑色のウマオイも。虫かごに入れて、キュウリやカボチャが餌である。数日は楽しんでいたが、すぐに飽きてしまう。放してあげたのであろうか。思い出せない。

## デンプン工場とトンボ採り

---

## デンブン工場とトンボ採り

シオカラトンボは面白くないから採る事はあまりしなかった。むしろ指をさしてグルグル回し、トンボが目をくるくる動かすのが面白くいたずらをした。イメージが塩っぽいからシオカラ、雌は麦わら色していたのでムギワラトンボ?

オニヤンマ

夏の田んぼはもっぱら銀ヤンマ採りである。オニヤンマではない。鮮やかな青い色、きれいな翅をしている「イネマンジョ」といつた。ヤンマの雄である。母親の実家の前に廃工場になつたデンブン工場があり、そのデンブンを取つた後の残物を貯める為、大きなコンクリートに囲まれた場所があつた。夕刻になるとこの溜池の周囲に雌を交えたヤンマが集まり飛び交っていた。翌日にトンボ採りをするために、七夕に使うような籠のついた竹を持って行き雌を捕まえ

るのだ。葉だけを除き、小枝のたくさんついたまま振り回して、羽が壊れないよう、絡ませるようにして捕まえる。雌は雄と異なり黄緑色なので判る。虫かごに翌日まで保管しておく。その雌の羽と羽の間を糸で結び、もう一方の糸の端を短い竹竿の先に結び、穂穂が出始めている田んぼのあぜ道に隠れて振り回す。雌は糸に繋ながられているので振り回されるように飛ぶ。雄ヤンマは田んぼの穂穂の上を区画に沿つて飛び回っている。それを端の方から誘い出すという訳だ。なぜ区画内を飛んでいるんだろう？ 雌を見つけた雄は飛んできてその雌に絡みつき、つがいになろうとする。ガサガサと音を立ててからみついてきた。そのこんがらつた時を逃さずあぜ道上に引き下ろし手で捕まえる。うまく採れないつがいになつてしまつて竿の先で、糸のついたまま飛んでいる。この方法で何匹でも釣れた。トンボ採りが終わり、夕刻になると今度は螢採りである。カボチャの茎に入れて光らせたり、蚊帳の中に入放して暗い中で光らせ楽しんでいた。

### バタリと鳥モチ

小鳥を捕まえる為の道具である。材料は直径三センチ程度の竹竿、藤蔓、



網と網の枠にする長さ五十センチ直径二ミリ位の太い針金、そしてたこ糸を用意する。竹を弓なりに反らせて藤蔓二本で弓の弦にする。針金をコの字型に折り曲げ、網の周囲を通して四角い捕獲網を作る。弓の弦中央部に網の元になる針金両端を挟み込み、コの部分を持ち、ねじつて藤蔓を燃る。燃られた藤蔓のバネ性を利用するのだ。反転し針金のコの部分が弓に当たり止まるよう撃る。弓の中央部に糸を結び、糸の先にかぎ状の引っかけ物を付け、ねじつた網の針金部分に引っかける。これを雀の来そうな所に、杭で固定、セットする。網が反転し、雀が網の中に入るような位置を見計らって、稲穂など餌をひっかけ糸に結んでおく。これに雀がついた時、引っかけがはずれて網が反動、バタリと反転し、雀が捕まるという具合である。大概は空振りで終わるが、時には雀が網を囲む針金に挟まれ、みじめな死に方をする場合があった。また弓を固定する止め杭が外れて失敗に終わるケースも多かった。子供作る罠だからね。

水のない冬の田んぼに雪が積もる。一面雪景色。遠くまで雪景色である。あぜ道が所々高くなつて、枯れた草が黒い陰を作る。雪面には日が当たり耀いている。そのあぜ道の斜面の雪を払いのけ、黒い土が顔を出したところに

稻の糊をばら撒く。そこに鳥モチを付けた竹串を斜めに刺しておく。(一平  
方メートル程度)そのまま家に帰り、数時間後に見に来る。運が良ければ雀  
や田ヒバリが降りてきて、鳥モチの付いた串に絡みつき飛べなくなっている。  
一度に数羽も獲れたものだ。バタバタと暴れるが羽に串が絡み付き飛べない。  
ナンキン袋に入れ持ち帰った。当時は可哀想という意識は無かつた。当然の  
獲物に嬉々としていた。

この鳥モチは市販されていたけれど自作もした。長兵衛どんの庭にモチの  
木があつて、その木の皮を剥ぎ、水に浸けて腐らした後、練つて、粘りけの  
ある鳥モチを作る。真竹の太いところを十五、二十センチ位に切り、割つて  
細い竹串を沢山作る。できるだけ細く作り、その先四、五センチ位のところ  
にモチを暖めて塗る。竹串の先がネバネバするようになる。これを並べ刺したの  
だ。小鳥用の鳥かごは幾つか有つた。親父が好きでヒバリやメジロなどを飼  
つていた。そんな状況でメジロを捕まえに山に行く。結局捕まえたことは無  
かつたけれど、人の話では、メジロが鳥モチを塗りつけた枝に止まると、ぐ  
るりと逆さに枝にぶら下がるのだとか。

竹林に数百羽群がりビーピーざわざわ騒やかである。集団は田ヒバリか？あるいは椋鳥か？雀は大きな集団にならないと思う。冬の竹林は葉が少なく、歩きやすい。パチンコでその下から狙うのである。葉が積もりカサカサと音がしてしまった。下から上を覗けば小鳥が鳴ずり、一斉に飛び立つ様は心地よい。時にはヤマ鷲が来るので狙うけど、落とした経験はない。空気銃を持つ大人はこれを狙つた。高校生も家から持ち出していた。積もつた籠の下には蛇が冬眠している。タケノコを探すと何度も遭遇したんだ。蛇はこの本には度々登場する；嫌いなのだ。

同じ冬から春にかけて、大人達はカスミ網を田の畦などに張り、カモを含めて多くの野鳥を捕まえていた。網が禁止になる寸前の事である。向かいの家が獵師でカスミ網を使って鳥を捕まえていた。時には、鳴を頂

向かいの家の息子は祭笛が上手で自分も習いたいと思っていたのだが年が離れすぎていたせいいかなかなか親しくなれず、教えて貰えなかつたなー。そういうれば楽器は木琴とカスタネットしかない。学校で買わされた。学校もオルガンであった。ギターが欲しかつたが？。

# 掻い捕り

---

く。これらの鳥を焼き鳥や鴨鍋にして食べた。血抜きした後、熱湯をかけると羽がむしれる。細かい羽毛はわら束を燃やしその上にかざす。燃えてきれいになる。にわとりの処理と同じ方法である。散弾銃である獵銃で獲つたものも頂いたことがあるが、細かい鉛の玉は食べても、排便の時、尻から出るからかまわないと言わたが？イタチの捕獲にもワナを使つてた。余談だが、そのワナを借りてネズミを捕まえたりもした。ネズミ獲りは他にも市販の物があり、捕まえたネズミの尻尾を切り取り学校へ持つて行くとなにがしかのお金を貰らえたんだ。伝染病予防の啓蒙策であつたのだろう。また向かいの家にはウケが沢山あり、お古を貰つてドジョウを捕つたりする。親父がこのウケを竹細工で作つた。その真似をしてウケ作りをしたが上手くできない。

### 搔い捕り

時期は稻の刈り入れ準備のため水を抜く夏から秋。沼地のくぼみに集まるウナギ、雷魚を捕る。また貯留池（堰き）の水も抜くので、古くなつた背負い籠の底を抜いたもの、あるいは大きなザルの底を抜いたものを持つて、逃げ回る鯉や雷魚など大型の魚に被せて捕まえる。水路の水も少なくなるので、

# フナ釣り

---



水路の途中に水溜まりが出来る。子供達はその両端に土手を作り、下手に向かってバケツで水を掻き出す。フナや鮎の子、雷魚の子、ソーメン子（ウナギの子）などがピチャツピチャツ、くねくねと泥の中に残る。時には大物も。沢山捕れるのも面白いが何時も捕れる訳ではない。捕ろうとして泥まみれになり追いかけたり、いそな場所を探すのが面白い。

#### フナ釣り

魚釣りはよくやつたなー。投げ棹は無い、振り出し棹も無い。親父のお古を貰った繼ぎ足し棹である。近くの竹山から篠竹を切り出し、枝を払い、コンロで曲がりを修正、一本棹を作る。これは何本も持っていた。

釣り場の川の幅は二メートル程度、深さも五十センチ程度、川というより水路で、子供にとつては川。パンツ一つになつて泳いだり、水を掻き出して魚を捕まえたり、三角網を引

いたり、水の多いときには釣りであつたりの遊び場であつた。両岸はリヤカーが通れる程度の農道であるが立派な通学路もある。コンクリートU字溝では無いから緩やかな傾斜の土手である。危険は危険であつたが今ほどでは無い。

餌はもっぱらミミズである。ミミズは台所から出る流し台の排水溝を掘れば、紅く手頃なミミズが何時でも手にはいる。獲物入れはバケツ。木綿糸にカラシ浮き、薄い鉛板を巻いてオモリとし、針を付ける。自転車の空気入れ部のゴム管がウキを差し込むのにちょうど良い。この針付き糸を釣り竿に巻付け、釣りに出かける。

梅雨の雨降るなか、学校から帰つたら出かける。中沼という場所近く、ここに我が家の田んぼがある。この田んぼに沿つた川で大きなフナがよく釣れる事が多かつたが、梅雨時はあぜ道に水が被り見えず、危険ではある。長靴の中に水が入り、歩く度にボチャツボチャツと音がする。しかも傘を差しながらの釣り。川のヘリにしゃがみ込んで糸をたれる。母親が田んぼの見廻りに来た。たぶん心配で見廻りにかこつけ様子見に来たのかも知れないけれど。結局は何も釣れない。帰るしか仕方ない。ばつの悪さが残る。時にはソーメ

ン子も釣れる、竹筒等を放り込んであつた川であつた。

学校帰りの途中にある豊田川には自転車で行く。比較的大きな本格的な川で、鯉、ナマズなど大物狙い。深い淀みもあり、最初は親父に連れられて釣り場所を知る。学校帰りに遠回りして、釣れそうな場所を下見、次に来る場所を決めておく。時期により水量が変わるから釣れそうな場所も変わる。鯉など大きいと小さい針ではハリスが切れて釣り落とす。だからといって大きい針にすれば小ブナは釣れない。ひたすら待ち時間が長くなる。

遠出をして、南白亀川（なばきがわ）まで釣りに出かけた。ここは海に近く、自転車で一時間近くかかる、大きな川であまり上手く釣れない。棹が短か過ぎたのであろう。ハヤというズスキの子であるが、これはミミズでは釣れなかつた。ゴカイという餌を捕る方法を知らなかつたからだ。大人が川の浅瀬に入り何か捕っているのは判つていたのだが。時々鰐や鮒も釣れるものだから、出かけた。行つてはオケラの事が多かつたのだけれど。ウナギを捕まえるに、大人は夜間に置きバリをしかけてた。えさはドジョウ。ウナギはドジョウを食べるのである。釣れたウナギの姿は見るに耐えられない場合がある。逃げようとして糸にからまり、自らの体を締め付け傷つける。この方

# ドジョウを捕まえる

---

法はやりたくない。

### ドジョウを捕まえる



六月、苗が活着して二十センチ程度になると、夜間、稲株と稲株の間にドジョウが伸びて寝ている。正確には水底にある。針を直線上に数十本並べた「ドジョウ打ち針」という物があった。親父が夕刻にカーバイドのカンテラとドジョウ打ち針を持ち出し、カンテラに火を付ける。バケツを持った私が後ろからついて行く。田んぼのあぜ道は細い。落ちないように長靴を履いてついて行く。深さは十センチ程度であるからカンテラに照され、澄んだ水底がよく見える。ドジョウと十文字になるよう水面からドジョウめがけて叩き下ろす。針に刺さったドジョウを、私が持つバケツのへりに、針を押さえていた根元を叩いてドジョウだけバケツの中に

落とす。百匹程度捕れれば大漁、針に刺さる程の太いドジョウであるから充分である。暗い夜の水面に、カントラに照された寝ているドジョウの姿は、今も想いだしながら、懐かしく思う。

ウケ(網)を仕掛けて捕る。これは梅雨時期から水を干すまでの夏にかけてである。また台風などで水かさが増した時などが狙いであった。田んぼと田んぼの間にあるあぜ道を切って、隣の田んぼに水が流れるようにしてある。

その所にウケを置いて、流れ下るあるいは上るドジョウを捕まえた。流れの逆向きに置くか、順向きに置くか腕の見せ所で、雨の状況、ドジョウの動く方向を見定めて置くのである。翌朝、バケツを持ってドジョウの収穫に行く。特に雷が鳴り雨の多く降った夜は沢山のドジョウが捕れる。時にザリガニや小鰯も入っている。

網で掬うことも楽しみであった。三角網に引き棒をつけたブツテという物を親父が



作つた。雨上がりにそのブツテとバケツを持って水路に出かける。獲物の居  
そうな場所は渦りの微妙な違いで判る。小川の両岸に長くなつた草が垂れ込  
んだり、ゴミが底に引っ掛けたり、そのような場所は、淀みが出来て  
いる。水が渦つていれば最高の漁場である。その向こうにブツテを放り込み  
手前に引く。ゴミや草と一緒に。引き上げ、水の中で左右上下に振つて泥を  
洗い流す。ジイツと網の中を覗きこみ、ドジョウや鰯が、他の小魚やザリガ  
ニがいないかを探す。土手に、器用に網の中の物を放り出す。ドジョウがに  
よろによろ、鰯がバタバタ、ザリガニは親づめを振り上げながら後づ去りし  
てゐる。大漁である。バケツからザリガニが這い出したり、鰯っ子の大きな  
物は跳ねて飛び出したり、いやはや楽しいものだ。太いドジョウが一番の狙  
いで、味噌汁の具である。こうは書くが空振りも多いのも事実だが。

捕つてきたドジョウは洗つてバケツの底に一晩放置する。水はほとんど要  
らない。ドジョウ同士が擦りあつて泥が取れる。また腹の中の泥も吐く。こ  
うしないと臭いし。ドジョウを長く生かす為にもこの方法が良い。それから、  
餌などもそうであるが、捕つてきたら必ず綺麗な水に、二、三日放置して泥  
を吐かす。よく寒ブナが良いとは、冬時期はあまり餌を食べないから腹の中



の泥も少ないからであろう。

稲刈りが終わり、秋から初冬にかけては、田んぼの湿り氣のあるところや水路の湿り氣のあるところを掘つて、土の中に潜っているドジョウを捕まる。土底の表面に小さな穴が開いているから、そこが狙い目であつた。たぶんドジョウの空氣孔だろう。現在ドジョウは絶滅危惧種だそうだ。明らかに農業のせいだ。(羽生淡水魚水族館で聞いてみたが) ドジョウの生態は判つていらないらしく、人工的には幼魚を誕生させられないらしい。ナマズや雷魚も見なくなつたが?

### ザリガニを釣る

さらに雨が降り、田んぼの稻苗の葉先が見えるか見えなくなるほどに水かさが増すと、力エルを捕まえ、足を持つて地面に叩きつけ気絶させる。両足をびーんと伸ばすので皮を足さきから剥き頭を覆う。踏みつけて内臓物を出し、足を糸の先に結んで、一メートル位の細い竹の棒に糸のもう片方を結ぶ。こうしないと餌になる力エルが水中に沈まない。これがザリガニを釣る釣り竿である。今の時代では残酷と言われ反対する親が出てくるであろーなー。

学校でもカエルの解剖をしていた。電池の電極にリード線を付けその先を心臓や筋肉に当ててびくびくさせていたのだから、ましいか。今やろうしたら残酷を感じて出来ないだろうなー。年齢と共に残酷さの意識は変わるものだ。

数本の竿を作る。田んぼのあぜ道にしゃがみ込み、竿をあぜ道に突き刺してザリガニがカエルに数匹食らいつくのを待ち、引き寄せてたま網ですくい抜る。ザリガニは尻尾を使い後方に勢いよく逃げる。後ろに引っ張るのが得意なのである。前には、いざりながら進む。だから餌にいざり寄り食らいつくと、餌を取り去ろうとして、後方に勢いよく引っ張る。この様子で竿が揺れザリガニのかかっている状況が判る。何匹も食らいついていればアツチに行つたりコツチに引っ張つたり。この時が狙い目で竿を立ち上げ網で掬い捕る。たま網を手前下から挿

## カエル

捕ったザリガニの食べ方を説明しよう。赤く大きな物は先ず良く洗い、茹である。尻尾を引き剥がして胴側の味噌を吸う。尻尾の殻をとり腸を取り去り食べる。親爪の肉も。余れば、剥き身にして、味噌砂糖を加えてさらに甘く煮返す。これは美味しいよ。殻は鶏のえさにした。赤くない小さいザリガニは、まな板の上でたたいて味噌と砂糖、油で炒めて、エビガニ味噌にした。ザリガニをエビガニと称していたのだ。

入するのである。ザリガニは逃げようとするが欲張りでか、仲間に取られないようにするのか、エサを引きすり下がろうとする。必然で餌は水の中で浮き上がる。その下に網を入れるのは楽なものだ。逃げるザリガニの何匹かは網を逃れるが、次から次へといざつてきて食らいつく。数本の竿を出すのだからとも忙しいザリガニ釣りである。

### バケツが満杯になるほど捕れた。

水かさを増した田んぼ、隣との境あぜ道は所々水が被る。静かな風にさざ波がパチャリパチャリと打ち寄せる。さざ波の向こうに力エルが顔を出す。その蛙を狙うのであろうか、よく泳ぐ蛇に遭遇する。あまりに水量が多く、あぜ道の境目が判らなくなるほどになると目の焦点が定まらなく、目眩がして田んぼに落ちたりしてからかわられる。このような風景、今では遭遇できない。

この頃まだ農業は無かつたので、またザリガニは稲茎を食いちぎる害虫で

あつたから大人も喜んで参加した。スルメイカなども餌に使つたが蛙餌には及ばない。餌がなくなつた時は、ザリガニの尻尾をむき身にして餌にする。ザリガニは共食いなのである。カエルだつてザリガニのむき身を餌とし、浮かぶ口元に近づければパクつと食らいついてくる。餌の補充が現場で出来た。ちなみにザリガニは尻尾とお腹の部分に卵を抱えこむ。薄い青紫の卵塊である。脱皮したばかりの柔らかい体はいとも頼りない。脱皮している場面も見たことが無い。その殻も見当たらぬ。なぜだろう？どうも自分で食べてしまつて残らないのかも？

高学年頃、ザリガニ退治に田植えの前に石灰窒素を撒くようになり、灰色に青の混じつた膜が水面に浮かぶ。その波間に慘たらしく茶色に変色したザリガニの屍、白い腹を見せあぜ道近くに吹き寄せられ浮かぶドジョウ。子供の目にもこの田んぼは駄目だなーと映る。夏の田んぼはトンボ採りであつたが、これもホリドールとかバラチオントか散布するようになつて、これも駄目になつた。

# 夏の田んぼ

---

## 夏の田んぼ

田んぼの水を干して稻を育てる時期がある。そのとき低いところに水溜りが残り、その水溜りにウナギやフナが寄り集まる。今ほど耕地整理が進んでいなかつたので起伏があつた。特に沼地の田んぼなどが狙い目であつた。網や鉤釣を持って捕まえに行く。稻株を避けながらであるが、これが面白かつた。田んぼの貝だから「タンケ」と称する、子供のこぶし大の黒く比較的大きな貝（カラスガイ？）が足の先に引っかかるときがあつた。この貝を七輪で焼き醤油を垂らして食べたが、固くて不味くてー。ナマズや雷魚も捕まえるには大きく、暴れて面白かつたが、食べるとなると美味しい感じはない。それに引き替えタニシはよく拾つて、楊子で身を取り出し、甘辛く煮て食べた。弁当のおかずにもなつていた。ドジョウと同じように田んぼの水底に転がつていたのである。「タツボ」と言う。田んぼには、食べられなかつたが、メダカはもちろんタガメやミズスマシもいた。ハヤ（アブラハヤ）と言つた小魚も多かつた。これは食べると苦い。田んぼは手伝いの場所ではあるが同時に、子供の遊び場所、漁の場所である。捕まえるものの宝庫であつた。

# 山狩りの探検

---

## 山狩りの探検

三角網に長い柄を付けたブツテを担いで冬の隣村へ探検。子供にとつては探検である。また裏が山で、山といつても十メートル程度の高さだが、子供にとつては山である。その山と山の谷間に、田んぼが奥の方まで続いている。その真ん中を水路が流れ出ていた。山合いであるから冷たく氷つて、その氷溜りにフナがいた。寒ブナが美味しいと言つて、捕まえに行く。氷を割つて網を投げて引くを繰り返す。何匹かが捕れる。夕飯のおかずにする場合もあるが、大概は母親に面倒がられた。捕りに行くのが樂しみだつたのだ。もちろん一人よ、一人でだよ。

ある早春には、爽やかな風と誰もいらない冒険心でその山道を歩き回つた事がある。素焼きの仏像の駒を拾つた。大人になるまで大事に取つてあつた。後で知つた事だが、江戸時代のメンコ（面子）であつたようだ。当時のメンコは素焼きの図形物であつたと骨董品の番組「何でも鑑定団」で紹介していた。一個百円位の値であつたが。今はもうない。息子のオモチャになり何処かに無くしてしまつたようだ。

作る

---

## 七・作る

作る作業には小刀が必需品、皆が持っていた。ナマクラというヘナヘナな小刀であつたが売られていた。男の子たちはこれで竹や木の枝を加工した。鉛筆もこの小刀で削る。鉛筆削りなぞ無かつたから学校へ持つて行つて良かつたのである。もちろん使い捨てのカッターナイフも無かつたのだ。規制は無かつたよ。この小刀を砥石で研いで切れ味を良くしたりする。

小刀と竹で豆鉄砲や紙鉄砲、杉鉄砲など作る。竹とんぼやバチンコ、呼び笛、釣り竿だつて作つた。他にもある。空き缶を利用したぼつくりや竹を加工して竹馬を作つた。大物はそう何回も作つた訳ではないがやつて見たといふことだろう。親に作つて貰つた物を思い出しながら作つていた。さらに風車を作る、ゴム駆動の模型飛行機を作る、鳥を捕まえるバタリを作る、またコマの心棒を作る、糸巻き戦車を作るなどなど、いろいろなものに使つたのだ。小刀を使うことを楽しんだのだろう。延長上にキリやノコギリ、カンナなども興味あり使つてゐる。使うだけでなくノコギリの目立て、小刀やカンナの刃を研いだり、鎌も自分で研いだ。ウサギの餌に草刈りをしたり、稻刈りも手伝つたのだから、必然である。だからといつて子供たちを傷つけたりはし

なかつた。振り回すことの危険性は良く知っていたと思う。応用知識も豊かになつた。自分の指を切つたことは何度もあつたが、たいした傷ではない。赤チンや血止め草をつけ、手ぬぐいの端を切つて縛り付ければ、傷の手当てはおしまい。勿論自分で、片方の手と口とを使って縛つた。その指を庇いながら小刀を使う。

竹鉄砲や笛の材料になる竹の在りかは川の土手か竹林。この竹林の外側の一部が竹やぶになつていた。お互いに住み分けているようだ。竹やぶは密集して生えていて中に入れないので。小さい体を竹やぶの中に割り込ませるようにして、数ミリの手頃な太さの物を切り出す。竹林には太い真竹がある。水鉄砲や竹馬の材料である。こちらは切り出すのにノコギリが必要になる。竹と竹の間隔があり、中に入りやすい。タケノコも採れた。伸びきったタケノコは水鉄砲など



鉄砲いろいろ

---

悪戯工作に都合がよい。近くに無かつたが布袋竹の瘤は欲しくてしかたなかつたなーもちろん木の枝も加工の対象であつた。丈夫で加工し易いのはドングリや椎の木の枝、その生木であつた。しかし圧倒的に竹の方が加工に適していたのであろう。

鐵砲いろいろ

弾にする豆は南天の実を使つたが、杉鉄砲や紙鉄砲は説明が必要かもしけない。杉の実は小さい。相当する竹の太さを選び作る。実は油分が多いので筒の中をよく遮蔽する。空気圧縮が優れ音も勢いも強く、顔に当たると痛い。紙鉄砲はその都度、口でグチャグチャと噛んで唾液を含ませ弾を作る。こうしないと竹筒の中を滑らないし、空気の圧縮も不十分になり玉として発射されない。紙の量が少ないとぐにやりと出てしまう。紙は新聞紙を千切つて噛んだ。

作り方を説明しよう。簾竹の節間が長くまつすぐな部分を切り出し、節から五センチ位の所を、小刀で回し切りして切り落とす。この部分が、手で持ち押し出す部分になる。一方この竹の内径にちょうど差し込める太さの細竹

を選び、砲身になる長い方の竹筒に差し込む。細竹の全体の長さを、手持ち部分に差し込む長さを含めて、砲身すなわち太い竹の全長よりも一、二ミリ短く調整する。弾を砲身元に詰め、細い竹を差し込んで押し出せば、二個目からポンといつて弾が飛び出す。

水鉄砲はもう少し太い真竹が必要になつてくる。子供の、この小刀ではちよつと無理、切れない。だから伸びきった真竹のタケノコを使った。これら小刀でも加工ができた。原理は紙鉄砲に同じだ。水を吸い込むピストンの部分には布を巻き付けて作る。押し出す手元も布を丸めて太くして差し込んだ。水を貯める太い部分、砲身は節を付けた状態で切り出す。その節にキリで小さな穴を開ける。バケツに水を入れて、ピストンで吸い込めば水が太い筒の部分に吸い込まれ、押し出せば勢いよく飛び出し、水鉄砲が完成する。うまく布を巻かないとすぐに外れてしまうので、糸でぐるぐる巻きにしたものだ。タケノコを上手に選ばないとすぐに壊れてしまう。柔らか過ぎるのである。鉄砲では無いが飛び道具として、木の又とゴム紐を利用してパチンコを作り雀を狙う。勿論市販もあつたが。輪ゴムを指で弾いて飛ばすなども覚えて、いたずらをする

糸巻き戦車、竹とんぼ

---

## 糸巻き戦車

裁縫に使う糸は糸車に巻かれていた。糸を使い終わった糸車は不要で裁縫箱の中にいくつも転がっていた。この糸車の両輪をギザギザに加工する。マツチ棒に輪ゴムを絡ませ、真ん中の開いている穴に輪ゴムを通す。反対側に出てきた輪ゴムに短く折ったマツチ棒を絡ませる。ぐるぐると燃るよう巻き、巻かれたゴムの回復力により、また長いマツチ棒の片側が支点になつて糸車を回転させる。短いもう片方のマツチ棒は空回りしないよう、糸車の車輪の面に切り込みを入れ、ストッパーにする。誰に教えてもらったのか覚えていないが（たぶん親父）何個か作つて向かい合わせて押し合つた。カブトムシの角に結びつけて綱引きをさせたり遊ぶ。回転軸になるマツチ棒が当たる面には滑りやすく、回転しやすいようにローソクの蠟を塗り工夫をした。戦車ごっこである。

## 竹とんぼ

真竹を貫ってきて、太い部分を立てに割る。さらにプロペラになる長さに切り、その幅に割り裂く。皮側の中央に鋸でX印に切れ目をつけ、交点にキ



りで割れないよう穴を開ける。その皮側に、穴を中心にして左右三ミリほど離し、互い違い斜めに鋸を入れ、プロペラになるよう、かつ傾斜を付けた羽になるように割り取る。小刀で羽をきれいに調整すれば竹とんぼの羽が仕上がる。軸は残った竹を三ミリ□に割る。角を削り落として手で揉み回せるようにする。先を少し細く削りプロペラの中央部の穴に差し込む。これで完成。プロペラだけが飛び出るように、差し込む穴を二個にして、軸を二軸にしたりした。

### 釣り竿作り

親父が釣りを好きで、折れて中途半端に残った竿の一部が何本か有った。適当に組み合わせ一本の竿に仕立てて使う。当時は振り出し竿ではなく、短い部分を繩なぎ合わせる繩ぎ竿であつたから、途中が折れたら他の部分と合うものを探せば良かった。無ければその部分を作るだけのこと。繩目は補強するために糸で巻けば良い。その部分にエナメルを塗つて固形化する。時には竹藪から篠竹を切り出し一本竿を作る。新しい竹は駄目、二、三年経た丈夫そうな竹を選ぶ。そのコツは下の方の幼皮が残つておらず、かつ、くす

編む、縫う

---

んだ濃い緑色をした物を選ぶ。しかも曲がりの少ない物を。曲がりは炎に当ててしまつすぐにする。これくらいのことは小学生でもやっていた。さすがに放置して枯らすところまではしなかつたが。吊り糸は木綿糸である。餌はミズ。蟹を捕る置きバリなどは麻糸を使う。



### 編む・縫う

ざるの編み方は小学校で工作の時間でも教えられている。竹加工も好きだった親父のせいか、竹籠の作り方、太い竹の回し切り、枝落としの方法など「竹割り」を使うことを覚えた。竹割りは古い軍刀を途中から折った物であった。「木元竹ウラ」などの言葉も覚えた。割りやすい方向の事だ。女の子も授業で、お手玉を作つたり刺繡をしたりする。編み針やハサミ、縫い針を使って裁縫をしていたのだから器用なものだ。

編むと言えば虫かごは麦わらを編んで作つたな。

魚を捕る網は自分でも編んだ。道具の手櫛も小刀と竹で手作りだ。織るほうでは紙飛行機だ。楓の葉でコインやおはじきを織る。竹の葉で筆舟など織り浮かべて遊ぶ。クローバーの花をたくさん摘んで花輪を編み妹たちを喜ばすなぞはお手の物。枯れたクローバーの花を束ね、相手の花の部分にぶつけて千切りっこをしたものだ。

小遣い稼ぎに縄を編う。稲藁の束から長く善いものを選りすぐり、水に濡らし、木槌で叩いて柔らかくする。これを手で編つて細縄にする。売るには足踏み機械で編つて太鼓状にする。母親は筵も作っていた。これも足踏みだつたが筵縫り機にかけて織る。この材料に選りすぐった稲藁が必要であつたから、手伝いをしたんだ。子供の力では締め付けが足らないので筵は作れなかつた。コマ回しの網、たこ揚げの糸なども、麻で縄を編つて作る。麻糸は売られていたが自作にこだわり自分で編う。

縄を編う手順を紹介しよう。相撲の横綱が使用する網の網打ちの映像を思い出すと良い。編い始める、その時の初めの動作や途中の手と指の動きなどを思い起こしながら書いてみる。選りすぐられた六本の糸を手にとり元を結ぶ。最初に足の親指と薬指の間に結び目を挟み固定する。三本ずつ右手と左

手に別けて持つ。左右の手に持つた藁が回転するようになりながら、藁を持ちかえる。その繰り返しを五回ほど繰り返す。ほどけないよう両手の平でくるくる擦り慣らす。片方の手は次の二本の藁をつかみ、擦られている縄の股に挟み、縄う作業を繰り返す。五回ほど縄ったところで更に次の二本の藁をつかみ、再度擦られている反対側の藁に足して縄の股に挟み、縄う作業を続ける。何度も繰り返して長くなつたところで、最初の結び目を尻の下に移動して固定をする。次々と縄う作業、藁の追加をして、目標とする均一な太さになるように、連續して縄つてゆく。手前が長くなつて縄う位置が高くなるので、できた縄を尻の後ろに引き、縄う位置が自分に合うところに来るようにする。繰り返した結果、数十メートル出来上がつた縄を擦り強いて余分な藁くずを取る。また突き出た藁の根本はハサミで切り短くする。最後は両手を広げた長さに計り、両端を左手に合わせて輪を作る。これを繰り返し左手に持ちきれる程度に束ねて終了。保管し縄として農作業に使つた。子供のすること、所どころに細い部分や切れやすいところがあつたりして笑いの種にされる。それでも役立つたのである。

縄を縄う機械を買い入れて、細縄の太鼓を作つたのはまだその後の話。面



白かったのであろう。小屋の軒下に機械が置いてあった。雨の日などは遊べない。それ故、積極的に縄を掏つたんだ。農家の男達は筵を二つ折りに閉じて「かます」という糊の入れ物を作る。この縫い糸に細縄を使つた。藁と細縄を使つて米俵を作る。それを閉じる蓋を作るなどもしていた。草鞋も作る人がいた。しかし当時は下駄と雪駄が主流だつたから、自分は買つてきたよ。だから下駄屋にも鼻緒を買いに良く行つた。そこでは、何か知らないが店の親父さんが下駄の板を磨いている。ついでにそれを見ていた。鼻緒が切れれば手拭いをちぎつて下駄の穴に差し込み、鼻緒を繩ぐ。穴に入りにくいから、燃りながら唾を付けねじ込むようにしてた。雪駄はゴム製であつたから切れれば捨てるしかない。自分で修理出来ない。

#### 八・採る 採つて食べる

カイコを貰つて来て机の引き出しで羽化させた。  
卵が引き出しに産み付けられ、幼虫からサナギにな



椎の実



るまで飼う。蚕の餌は桑の葉である。桑の木が至るところにあってその実を口に含んだ。ドドメと言つたな。グミ、楓の実は家の庭にあった。熟したものを探まんで食べる。

アケビ、山栗、椎の実近くの林や堀の脇に自然木があるのを知つていて、毎年秋になると木に登り採取した。もちろん私有地の木であつたが咎められる事はない。栗や椎の実は母親に炒つてもらい、同じく炒つた落花生や大豆と一緒に混ぜこぜに小袋に入れ、持ち歩いて食べている。炮烙があつて落花生など炒るのに使つていた。

柿、ミカン、ひわの木も庭にある。梅の木もあつた。これを食べたな。買うことはない。青梅は青酸が、酢っぽくて美味しいのでたびたび食べている。熟すとあまりお美味しいしない。梅干を作る。紫蘇の

# 薬草を採る

---

葉にくるみ、漬ける。梅酢は大根を赤漬けにする。この赤漬けは好きであつた。

梅の木には毛虫がいっぱい付き閉口したな。この毛虫退治をする為に、竹の先に布を巻き、油をつけて燃やし、毛虫を焼き落とした。毒虫と言えばムカデである。「はがち」と言つた。雑巾の中にいて刺された事がある。腫れて非常に痛い。



#### 葉草を探る

クチナシの実は塗料としてコマに塗つた。打ち身に良いと言われ、またスーと感じて気持ち良いので足にもよく塗つた。むしろ足の脛が黄色になるのでそれが面白かったのかもしれない。カラスウリも色づいた実を手足に塗つた。黄色になるからかも。しもやけに効くと聞いたが？オオバコ、ドクダミも葉草と聞いていた。しかし、利用した記憶はない。オオバコはウサギの

# 山菜を採る

---

餌によく採取した。ゲンノショウコが豊田川の土手に生えていた。浜宿のお婆ちゃんに連れられ採取に行く。お婆ちゃんはわざわざ採取に出て来ていたのだ。乾して腹痛の薬にする。血止め草は葉を揉んで傷口にくつつけた。俗称蛇イチゴと言う。どちらが俗称なのか?逆かな?茶は生け垣の茶葉を摘み、農学校に持ち込んだ。新茶に仕立ててくれる。



### 山菜を採る

茂原には飛行場跡があつた。円体壕も幾つか残る。飛行機の格納庫である。滑走路には壊れた戦車が放置してあり、油の付着した、何か判からぬ部品が散乱していて、拾つて持ち帰りオモチャにしていた。滑走路の両脇に子供の背丈ほどの水路がありこの水路には比較的大きなフナや鯉がいた。当時この滑走路を利用してオートレースが行われた。見にいつた記憶である。今考えると戦後間もないと

ヤリカンカー

---

いうにそのような大会が行われていたのだ。

ワラビ、ゼンマイはこの飛行場跡近くの林に出ていた。芹は近くの湿った田んぼにありこれを採取。キノコも同様で、滑走路と滑走路の間の松林にキノコが生えていた。キノコ採りにも行ったがどれがどれだかよく覚えていない。シメジとか松茸。これくらいしか判からなかつた。一人で行くのではなく、キノコを知る友と行くので教えられるままに採取。ただし毒キノコを心配して採つて来ても食べた記憶はない、むしろ途中で自然木に登つて生栗を齧つた。この味は忘れられない。

## 九・祭り

### ヤリカンカー

この祭りには小学生以下の子供たちが集まつた。正月、七日が過ぎると、門松を処分する。その握りやすい太さのところを切り、皮を削つて太鼓のバチ様なものを作る。子供たちは各自二本ないし一本、それを持って当番の家に行く。順送りに決まつてある当番の家は、土間に、太く長い丸太を横に吊しておく。その両脇に子供たちが座り、持参したバチで丸太を叩き合うので

天神様

---



ある。十人位集まるであろうか。そのときの歌、かけ声がある。ヤリカンカ一、スリカンカ一、スツテモスラネモ、ナマミソダ一、ナマミ、ソダ一。ミツチヨト、コ一ボガ、ショウベンシテ、グチャグチャダ一、グ、チャグチャダ一と言つて笑い合うのである。当番の家は暖かい食べ物や餅を用意し、子供たちはそれを食べ食べ、叩きながら笑い転げる。寒い正月のこと、土間には焚き火などする家もあり絵になる。「ミツチヨト、コ一ボ」は南部のグループの力キ大将のあだ名、その子たちをけなすことで笑い合う。今ならイジメとして教育委員会に取り上げられそうだ。南部は南部で同様の集まりである。

### 天神さま

天神さまの周りは竹やぶで、村北側の中程にあり、道路から少し奥まつた所にあつた。普段、神社までは行かない。そこで遊ぶ事もない。しかしこの時は、中学三年生までの子供たちがこの社に集まり、食べ物を持ち寄り一泊する。その滅多に行かない場所で一夜を明かすのだから、みんな戯々懶々。

社に土俵があり昼間は相撲や広域鬼ごっこをして遊んだ。

午後になると社から七福神を取り出し、小学生以下の、すなわち下つ端の子供たちが、この七福神を持つて村をねり歩く。家から家をまわるのだが、農家ゆえに庭が広い。大概は隣家との往来に隠れ近道がある。子供たちはその道を通りまわる。その近道は木が覆い被さっていたり、境溝に細い木の橋が掛かっていたり、そこを「天神さまが舞い込んだー」「福の神が舞い込んだー」と声を張りながら一軒一軒まわる。お小遣いとお菓子や何やらを貰つてしまわる。お小遣いは夕飯の買い出しに使つたり、明くる日余つたお小遣いを、子供たちで分け合つたりしたものだ。時期は秋の収穫が終わった頃だつたかなー、ミカンがなつていて、悪ガキはそのミカンを失敬したりしたんだから。定かでない記憶である。

中学生はその社で一晩明かすため、布団を持ち込んだり、夕飯の準備をしたりに忙しい。食べ終わり、小学生を帰せば、夜に誰かが入つて来ないよう、雨戸を内部から打ち付け固定して戸締まりをする。なにせ古い神社、ガタガタであつたから。夜間に参加していない中学生や卒業した先輩達がからかい半分に襲つてきたり、泥ボーに入るからだが。キャーキャーわー大騒動

母親の実家に

---

になる。からかい半分であるから大事になることは無い。また皆で騒ぐことは楽しい事であつた。

## 十・夏休み

### 母親の実家に

一年生の頃、すでに大人用自転車に乗れた。三角乗りから始まり中乗り、サドルに腰掛け乗るのはまだ先である。茂原から母親の実家であつた南白亀（なばき）村浜宿へ、中乗り自転車で十数キロの田舎道をこいで行く。姉と一緒に事が多かつたが一人で行く時もある。時にはチエーンが外れ、通りかかった人に助けられたりしたことも。母親の実家には爺ちゃん婆ちゃんがいて、夏休み中、泊まりに行つていた。暑い夏の真っ盛りに、途中に親父の故郷南吉田が在るが、寄らずに、まつすぐ母親の実家浜宿へ向かう。浜宿には従兄弟たちがいたので遊び相手がいる。豚小屋や広い庭、裏の畑にはスイカやまくわ瓜、トマトと美味しい物が植わっている。ほかにもサトウキビやトウモロコシなどあり、嬉しさ尽きない。ましてお婆ちゃんと浜に行けるのだからこの上ない。従兄弟の母親の実家が、広い畑の向こう側にあり其処に

## 海水浴・ハマグリを取る

---

も従兄弟の従兄弟が居り、同じ年で、この子たちともよく遊んだ。更に向こうには溜め池があり、ここでも魚を捕まえる事や、水浴びをしたり釣りができた。今なら危険な場所と見なされ「立ち入り禁止」の柵が設けられそうだ。夏休み中浜宿で過ごした帰りに、叔父さんが馬車で送つてくれた事あり懐かしい。スイカを途中で割り、食べながら帰る。農作業用に馬も飼っていたのである。帰りに親父の実家にも寄つた事がある。大概、親父と一緒に時だつたから、墓参りである。教えられた歌が「仙座の宮山、じょうぼ」（入り口から境内までの小道）が長くてお化けが出そうだぞエー』どういう意味か知らぬ。前後の節を覚えていないので。

### 海水浴・ハマグリを探る

母親の実家から数キロ先の九十九里、浜宿海岸まで徒歩で約1時間、泳ぐ支度でトコトコと歩いて浜に行く。浮き袋にスイカやまくわ瓜、おにぎりなど弁当持参である。お婆ちゃん、従兄弟たちと一緒にある。浜に近づけば浜の匂い（千ものの匂い）、潮風の匂い、波の音が聞こえてくる。浜の砂は熱く熱せられ雪駄では大変だった。砂浜を、片方の足の上にもう片方の足を乗

せ、熱さを逃げる草を探しながら、所どころに生えている浜草の上を飛び飛びで伝い波打ち際まで行く。そして水遊びの場所を探す。

場所を選ぶのにコツがある。波打ち際は一見同じ様に見えるが、引き潮は一定のところへ片寄るように引いて行く。ミオ（水脈）と言つて潜伏した川状の流れがそこにある。そこで波に飲まれると沖の方に流されてしまう。その目印に、浜には鳥居を建ててある。船は出やすいのでその筋に船を置いてある場合が多くた。もし流されたらジタバタしないで流れに身を任せよと教えられた。黒潮の流れに乗り銚子沖で船に見つけられると聞いた。本当かどうかは判らぬ。そこから避けて場所を選び、筵を敷き、基地にする。水際で荷物を広げ置き、お婆ちゃんは腰を下ろして待つている。

波打ち際での遊びは楽しい。海水パンツなど無いから普通のパンツで、ゴムが水に浸ると伸びて脱げてしまつたりする。泳ぐと言つても泳げない。腹這いになつて波乗りである。砂を掘つて山を作る。波がくるたびに崩されてしまうがそれがまた楽しい。遊び過ぎ、唇が青くなるほど寒くなつたら砂浜に寝ころび暖まる。昼になればスイカやまくわ瓜を割り海水に浸けて食べるはまた美味しい。またいわゆる潮干狩りである。泳ぎ遊びの途中に、波に打

たれながら両足を揃えて後ろ向きに立ち、踵を支点に爪先を左右に動かして、後ずさりしながら砂を掘る。ゼンナやシオフキが浮き上がる。波が来れば引き潮に貝が逃げる。あわててそれを拾う。一方では貝が砂に潜り逃げようとする。

干もの匂う海岸をうろつき歩けば、打ち寄せられた貝殻や海草拾いなどもできた。その良さそうな物を探す。ヒトテの貝殻は星形で格好が良い。集めて夏の宿題の一つが片付く。海ホオズキなど見つかれば口に含んでグーグーと鳴らす。これは海岸に打ち寄せられた海草の一種で、大きさ一センチ位、小さなバナナ状の、房になつた物である。一個一個をもぎ取り、口に含み、穴の開いている方を歯ではさみ、舌で押し潰してグーグーと鳴らす。塩味がしてなかなか美味しかった。時には水辺に魚が、サバだったか泳ぐ。それを追いかけるが捕れるはずも無い。疲れれば基地に座り込み残りのスイカで水分を補給、肩や顔は真っ赤に日焼けして、塩水に痛い。歩いて帰れば直ぐに水を被り改めて痛さが身に滲みる。

## シジミ採り

---

## シジミ刈り

浜宿の夏は暑い。二年生の頃だったか、南白亀（なばき）川に近所の中学生を先頭にし、従兄弟などと数人で自転車の後ろに乗り、シジミを探りに行つた。川と言つても海に近い川口である。淡水と海水の混じり合う場所にシジミが沢山採れたのだ。所どころが砂地で、足で揉めばシジミが浮き出てきた。熊手などは使つた記憶がない。このようなところは深いところ、浅いところ、凸凹が日々変わる。その深いところにはまつてしまつた。要するに溺れたのである。幸い中学生に掬い上げられて助けられた。浜辺で腹ばいの波乗りはできても泳げなかつた。浜近くの中学生は泳ぎが達者である。直ぐに気付き、潜つて下から掬い上げる。新前の子供を連れて來たので注意をしていたのだ。案ずるかなである。従兄弟はお婆ちゃんに事の次第を告げる。後でお婆ちゃんはその中学生の着物を縫い、作り上げ、お礼に儀を連れて行く。その人の家の前を通る度に思い出す。守さんといつたかなー。その家も代が変わつて知る人がいない。

# お盆

---

## お盆



息子の新盆である。子供の頃を思いだし想いだ  
ししながら盆飾りを作つてゐる。子供時代のお盆  
のほとんどを浜宿で迎えた。迎え盆に送り盆。家  
紋を入れた提灯を持つて墓と寺に行く。盆飾りを  
作る手伝いはしなかつたが、出来上がつた盆棚は  
よく覚えている。母親の弟が戦死している事もあ  
つて丁寧な盆飾りであつた。竹で灯籠を作る。太  
い部分を背丈に切る。三節ほど六つ割りにして割れ  
が広がらないよう、リングを作つて上下に嵌め込む。  
節目を利用し、中にサンを渡して広げる。このサン  
中央に釘を立て口ウソクを立てる心棒とする。灯籠  
は半紙を貼り灯りにする。葉付きの枝は、盆棚の両  
脇に立てる。茅の細縄を棚の周囲に巡らす。色紙を  
切つて紙垂を垂らした。茅茅馬も作った。ガマの穂  
とほうすきを吊す。棚にはゴザを敷き、盆花とスイ

春休み

---

力やまくわ瓜、南瓜、トウモロコシなど供物をあげる。当時スイカは棚スイカと言い、畑に出来た一番大きく立派なものが選ばれていたのだ。

### 春休み



春の浜は、暖かい砂浜にうつらうつら、寝転ぶ。南に遙か大東岬を望み、北に鏡子は見えない。引き上げられた船の先に砂浜のみが陽炎の向こうに霞む。馬蹄形磁石を持って行き、砂の中を転がす。砂鉄がくっ付く。これも面白。時には砂浜にきらきらと宝石のように輝く石を見つける。瓶のかけらが波に磨かれ、日光に反射している。ゼンナと呼んだハマグリを取りに興する。これは砂を吐かして翌日のおかげになつた。潮吹きという小さい貝も波打ち際にたくさんいた。ナガラミという美味しい巻貝もいたんだ。ちょっと深い沖でないと採れないから泳ぎのできない自分には無理であった。満潮のタイミングでちょうど地引き網を引き

# 畑作業

---

上げる場に遭えば、網を引き上げるにつれて波打ち際に逃げて来た魚を捕まえることができた。引き上げている人たちに邪魔だと怒鳴られながら、アジ、鰯などが浅瀬にこぼれて逃げて来る、それを捕まえる。なかなか捕まるものではないが、鰯などはその場で手開きして海水に浸けて口に放り込み食べる。うまいぞー！ アジもそう。ゼイゴを引き剥ぎ、腸わたを摘まみ取り海水に浸けてその場でかぶり付く。

砂浜から遠くへ投げる、投げ釣りをしている人達もいた。ちょうどエイが釣れたところに遭遇。水辺に引き寄せられた時、エイの子を数匹産み落とした。エイは卵でなく子を産むのである。釣り師はナイフが必需品でエイの尾の付け根にある毒針を切り落とす。これをまず最初に行わねば危険である。

## 十一・手伝う

### 畑作業

畑仕事の手伝いにはあまり覚えが無い。それでも、野菜の作り方は知っている。鍬を使つて畝の作り方も知つてゐる。これからみて母親の手伝いでもしていたのだろう。畠作に比較しやさしかつたからか、或いはフナを生け捕

るような遊び要素が無かつたせいか、見ていただけなのかも知れない。子供の頃の記憶は確かなのだろう。数少ないお手伝いでさつま芋、ジャガイモ、さと芋などの植え方も知った。保存の方法も、土を掘り畠藁を敷き詰めて保温し冬を越すことも。春になりさつま芋の芽が出て、そのさつま芋から芋苗を探ることも知った。ジャガイモは、芽の出る凹みをキズつけないように、二個か三個に切り分け、切り口に藁を燃やした灰をまぶして植え付けた。これも知恵である。

高学年の頃か親父が茂原駅の近くに畑を借りてさつま芋の栽培をした。テンブンを撮ることが目的のさつま芋である。農林何号とか言う。さくを切つた畝にさつま芋の苗を差し込むようにして置いて行く。上から土を被せて植え付けはおしまい。葉が蔓延り始めると、収穫までに何度も蔓を土から剥がす作業がある。これが結構大変な作業である。収穫時、大部分の芋は畠から直接、業者が持つて行くのであるが、一部のさつま芋はリヤカーに積み家まで運んで来た。ある時、帰るのが暗くなつた。親父がリヤカーを引き、私が懷中電灯を持ち、後ろから押した。前から車がきて、リヤカーの右端にぶつかる。幸い怪我は無かつたから良かつたが。私がリヤカーの前方を照らさな

かつたのが悪い。車の方も当時三輪車であつたから見えないところ同士でぶつかつた。反省すること頻りであつた。

さつま芋に花魁（おいらん）という種類が有つた。これを蒸かし、乾燥芋にする。二階の瓦屋根に広げ干す。二、三日後の状態は柔らかく、非常に甘くなつて食べ頃である。屋根に上り横になつて、日当たりながら食べた。これが美味しく乾燥途中で無くなつてしまふ事多々ある。



芋と言えば自然薯だろう。茶の木が家の周囲にあつてそれに自然薯のツタやカラスウリのツタが絡み合つていた。ムカゴやカラスウリがなる。自然薯は時期になれば、茶の木の元を掘る。根と根の間に入り込み難しい掘りかたで必ずと言つていいほど途中で折れてしまう。芋をすり下ろし味噌汁を加えて薄め、ご飯にかけて食べる。する道具はすり鉢である。

先に竈の前の煮炊きする時の樂し

さを書いたが、竈の燃料は山から採つてくる茅や木の枝だ。勿論枯れていなければ燃えない。線路の脇に、下草刈りをするため林を借りていた。その下草や落ちた木の枝を乾燥させ、燃料としていた。山林の持ち主にとつては、下草が刈られきれいになるので都合が良い。ここでもリヤカーが活躍する。どこの家にもリヤカーは有つたと記憶している。

線路の両脇には細い溝が掘つてあり、湿気があり苔など生えていた。もうせん苔といふ食虫植物も生えていて、当時でも天然記念物であつたが、虫が捕まりもがいているのを見ていた。葉がネバネバしている。房総東線の長い直線部分で、茂原駅手前でカーブしている。茂原駅方面からくる汽車は見えない。線路に耳を当ててゴトンゴトンという音を聞く。山刈りのさなか、わざわざ聴きに行く。二時間に一本位しか来ないから大体の時間は判かつていたのだろう。二銭玉だか五銭玉だつたか価値の低いコインを線路に置いて漬してみたりしている。かなり危険なこともしたんだな。今なら確實に補導される。風呂焚きにもこの燃料は使う。太い木は薪割りをする必要がある。薪割りを使つて細く割るのは結構大変で疲れる。風呂水は井戸から汲んでくる。これも男の子の仕事。風呂を沸かすのも姉と交代で行つた。

田植えの時期に

---

## 田植えの時期に

初春から夏にかけての手伝いは面白かった。代掘きやあぜ道の修復は重労働で牛の出番であった。あぜ道は「クロ」と称した。あぜ道にマンノで土を盛り鍬で撫でながら修復していく。その色が黒かつたので「クロ塗り」といつたのであろう。このクロ塗りができると子供も一人前である。苗代にする田んぼが堰き（貯留池）の近くにあり、その堰きから苗代に水を引く。稻作はこの苗代の手伝いから始まる。しかし水を引くときに流れ出るフナがいて、子供はこのフナつかみの方が面白いに決まっている。当然である。十時のお茶時間や昼休みはフナつかみである。手のひらサイズの比較的型の良いフナであつたのでさらに面白い。そう簡単には捕まらないので興奮して追いかけれる。ずぶ濡れになりながら、何匹も捕つたなー。親父や叔父さんも一緒にだ。

苗代作りである。代掘きが終わったら水を抜き、一メートル幅位に手や鍬で土を盛り上げる、木のヘラで平らにならす。盛り上げた部分が湿る程度の水量すなわち泥が落ち着き、動かない程度に固まつたなら、湿して置き発芽仕掛けた耕を均等にばら蒔く。その上から筒状の転がしを使い種耕を土の中に押し込む。こうして発芽を待つ。発芽するまでの間は細かく水量を調節

した。また鳥に食べられないよう種類の上に糊殻を焼いた物を撒いていた。ヘラは木材の丸みの部分を利用する。一メートル程の長さで撫でることができるよう取っ手がつけてある。撫で作業はちよつと無理だったか。転がしも直径十センチ長さ五十センチ位の筒状に細かい金網を張る。心棒を通して柄をつけ、熊手のように前後に引いたりして転がす。これで糊を苗床に押し込む。これは子供にもできた。糊殻を炭化するのは簡単だ。煙突にする底の方に、いくつか小さな孔を開けた筒を立てる。筒のまわりに少しの枯れ葉を置き、火をつける。子供にとつて火遊びは楽しいのだ。そのまわりに大量の糊殻を被せれば自然に炭化が広がってゆく。適当なところで広げ、水をかけて消さないと皆白く灰になってしまうけれど。

二十センチ程度に育ったなら、苗代に樽椅子を持ち込み、腰掛けて苗を引き抜くようにむしり取る。手で掘める程度の量で握り、腰に束ねて刺してある稻藁を、二、三本抜き取り、クルクルと苗束に巻き、藁の先を親指の腹で折り、巻いた藁に挟み込むようにし、固定する。藁も下葉の柔らかい葉は捨とうようにして除いておくと使いやすい。この束ねた苗を、浮かべてある田舟に放り込む。集め、田植えをする田んぼに運び、田んぼのあぜ道から適当な

配置に苗を放り込む。そして田植えが始まる。

田植えももちろん手伝った。裸足で入る田んぼの土の感触、指と指の間に入り込むヌルリとした泥の感触は忘れられない。田舟に苗を乗せ、田んぼの真ん中に運び、適当な間隔に一束一束と置いて来る。田舟に乗るのが面白くてー。田んぼの中を歩いていると、もちろん裸足であるからヒルが吸い付く。何時付いたか判らないが付いている。これは気持ち悪い。タンケという黒いこぶし大の貝も足にあたる。田んぼでのお茶やお屋のにぎりめしやお新香の美味しさは殊の外である。子供は飽きてしまい、先に帰させられる事多い。

田んぼから帰る途中にはこんもりとしたあぜ道の境があり、そこにグミや木イチゴ、ドドメが黄、赤、紫などに熟していくそれをついばんでみたりする。

秋の稲刈りまでの成育時期には手伝う事は無い。が、前にも書いたように夜にドジョウを捕まえに行く。ウケをセットし、これもドジョウを狙う。稲刈りした後は沼の水溜まりで雷魚や鰐を狙う。時期の稲刈りや柵を作つての稲干しは力仕事であるが難しいことはない。終われば小さい穴を見つけては土のなかのドジョウ捕りか、逃げ舞うイナゴを追いかけた。イナゴは鶏の餌である。

古い発動機を回して、稲こぎをする。当初は足踏み機でギーコ、ギーコギーコという音を出していたが親父が中古の発動機を入手した。発動機との接続はベルトである。稲こぎ機との間隔はベルトを文掛けにして、発動機を移動し杭で固定する。起動は手回しである。タイミングよく離さないとバックフランクシューでフライホイールが逆転し怪我をする。子供にとつてはかなり力が必要。古いが故に時々分解し、プラグの掃除やら、発電機の放電のタイミング調整をしなければならない。あるとき燃料タンクからガソリンを抜く必要があり、口で吸い出すことを試みた。親父がやっていたから真似たのだが、タイミング悪く、ガソリンが口に入り、ひどい味わいをした。使う度ごとに分解、調整が必要であつたので、とうとう新品を買う。それ以来発動機の分解はしていない。機械いじりが苦にならないのもこの時の教訓か。苗代作り、田植えから稲刈り、脱穀、選別、モミスリ、精米と全て小学生高学年までにはできた。クロ塗り、即ちあぜ道の修理や代かきは力仕事、牛を使う仕事で、これはできない。専業農家の叔父さんに依頼していた。

## あとがき

ドジョウにしてもザリガニにしても食べるためには数が必要。一匹二匹捕まえる訳ではない。数を捕るためにには工夫が必要になる。ます多くいる場所の目利きが必要。何処にドジョウが潜んでいるか、ザリガニはどの田んぼで捕れるか、鮒の溜まり場所は何処か、シーズンは何時か、そんな事は自ずと知つていた。勿論釣り針はどこで売っているか、何処から竹を探つて来るか、餌は何にするか、どこで餌を捕まえるか、ミミズのいる場所など、当たり前の知識である。餌に工夫、道具に工夫なども臨機応変である。

記憶に残る、手伝いや農作業のやり方は江戸の時代とあまり変わりなかつたのかもしぬれない。本多豊著「絵からわかる知らなかつた江戸のくらし 農山漁民の暮らしの巻」遊子館、を読むとそのように思う。渡来したザリガニと導入された発動機程度が異なるだけで、本の絵の中に出ている事とあまり変わりない。それが発動機を入手した頃から、またホリドール、バラチオンなど農薬を使い始めた頃から一変したように思える。子供が手伝う機会が失われたようだ。さらに下つて、熊谷のようなこんな田舎でもコンピューターゲームに夢中になっている子たちの多い現代とはかなり異なつてしまつたか

も。ここは山や川に近く、遊ぶ所はいくらでも在るのだが、注意事項多く、禁止事項多く外で遊ばない。子供たちの生活も急激な変化であろう。良いことか悪いことか判らぬが、大人も子供も自然に対する興味や感受性が鈍っているのではないか？

昔と今と将来、果たしてどのような社会が良いのであろうか。私の偏見に基づいて、予想される幾つかのこれからの中社会パターンを考えてみる。

#### その一 教えられ続けた人達の社会

幼稚園から大学まで、さらに仕事に就いた初期まで、ずっと人に教えられ続けられる現代人である。自分で考え工夫する力が弱いことは自明の理であろう。それでも天性を持つ人はそれなりに創造性を育んでゆくであろうけれども、大多数の普通の子たちは自然の撻に鍛えられる事なく、平和ぼけと揶揄されながら大人になり一生を過ごす。

共働きを勧める時代だ。親が忙しい、子供たちの遊ぶ安全な場所が無いなどという理由で託児所的保育園を作る。これが狭い保育園だから、単に成長期間を過ごさせているだけにならないよう、小学生に優るいろんな教育をする。英語やコンピューター知識なども教える。小学生は授業済んだ後でも学

校に留まり、帰れば塾通い、そしてテレビにスマホ。自然との対話なんてほんの少しだけだ。自然は映像で見るもので体験するもので無くなっている。田舎に回帰する人、泥遊びする小学生がニュースとして流れる。ニュースでなく、当たり前の事として報道されて欲しいものなのだが。

年を経ても年金で老後を楽しもうとする事が目的では無い。ただ働き続ける事が目的になり、働く以外に趣味が無い。定年後にする事が無いから闇雲に勤めを継続したがる。一方でこれ幸いと六十歳超えても働きせる社会である。天変地異あっても生活は保証され、無気力に一生が過ごせる平和？な社会。誰かが助けてくれるから良い、環境がそうなっているから良いという思想が蔓延している。自然を体験していない人たちが親、指導者、マスコミ、政治家を構成しているから、助けられてくれないと苦情を言う、誰かを辞めさせると騒ぎ出す雰囲気が当たり前の社会でもある。

その二 幼少時代をコンピュータゲームのみで過ごした人達の社会  
子供たちに対しても国を挙げてコンピュータを配布、使用する教育であるから幼少時代からスマホは当たり前にこなす。その手つきは見事である。知識もスマホから得る。大人顔負けの、尋常ならざる知識を遙かに超える、そ

んな子供たちがいる。電子ゲームに教えられ続けた人の特徴は、とにかくでき上がっている物に、すなわち工作物（人工知能ロボット）に慣れ、マニュアルその通りに使いこなし（使われ）、人目に力強く見える。働く作業に工夫する必要性は無い。ロボットのやる事や、自動運転車は不可欠で、あたりまえの事として扱う。そのような人達の多くいる社会。

一部のソフト製作に長けた創造性を發揮する人間がいる一方で、その人に創られたものに操られ、牛耳られたように画一的な作業をする一般の人達である。結果として、（作られたソフトを内蔵したコンピュータに使われ）ロボット化する人達、（人工知能と称するIT技術で）皆が一様な顔を持つ人達になる。大部分の人達がコンピュータの踏襲で生活できる。自然界に触れずに一生を終える事が出来る人達。このような人達が増殖した社会がある。

老後も新しいロボットの使い方を覚え、さらに新しく出るロボットに関する勉強をして勤めを継続する。すなわちロボットに使われる人生を過ごす。それで終える。電子ゲーム的パチンコ、賭け事に霽中。若い人が、遊びに行く先は作られたテーマパーク。このような人達は殺戮シーンに慣れっこになつていて。コンピュータを使い続ける事が趣味。すべてがテクノロジー化する

と何をするにも金がかかる。結果、欲求不満の自殺者が多い都会人社会。

最近二十三才の会社員が近所の小学二年生を連れ去り殺してしまった。線路内に遺棄して電車に引かせた。また若い夫婦がイジメで食事を与えず、五歳の子を殺してしまった。この若者達、普通のよい子のような顔つきだったが。この人達などもずーっと自然の事象や四季の移り変わりなど知らないでいたんだろうなー?

普段コンピュータゲームに夢中になっている、たまたま遊びに来たその子を近所の川に釣りに連れて行つた。初めて手にしたフナをぶら下げ歓喜してた。後にこの子から感謝状を貰つた。パパママも普段経験させることのできないような遊びができたと喜んでいた。かえりみて本当に自然に対する感受性を失つてしまつて良いのだろうか。このような単純な疑問から私が思う理想的な社会を推測してみた。

その三 いろいろ自然体験をした子供たちが育つ社会

三割四割三割の遊びをさせたい。すなわち幼少時代を教養課程よろしく農漁村地で過ごさせ、或いは田畠を持つ保育園や小学校で過ごさせ、中学生の

よう大きくなつてから都会的生活（コンピュータに囲まれた生活）をさせる社会はどうかなー楽しそうだね。さすればロボットやコンピューターを工夫して使う方に体が動き、定年後のサバイバルにも順応できるのではないか、と思う。自分で出来ることは自分でやるという夢追い人にしたい。海近くの子は海遊びに夢中になつて欲しい。森近くの子は山狩りに夢中になつて欲しい。川近くの子は魚釣りに夢中になつて欲しい。すなわち食べるための糧になる遊びをする子供たちであつて欲しい。感受性の強い間に買って食べる行為だけで無く、自分で育てた物を食べる、自分で捕まえた物を食べるという行為を経験しておるべきでは無いだろうか。定年後は自然界の中で動植物と共に生活したいと願う人達が多くいる社会であつて欲しいが。

その一、その二の社会について、信じられないことであるがその兆候は有る。電車内で親子三人それぞれにゲーム？を楽しむ家族を見た。座るとすぐに iPad を開きヘッドホンを付け、降りる迄何もしゃべらずにゲームに熱中している。違和感を感じざるを得ない。また、オリンピックのマスコットさえもどこかのオリンピックマスコットと良く似ている。特に創造的だというようなものでは無い気がするが？絵

を描くにもお絵かきソフトで、音楽を作るのも音楽ソフトの範囲で作る。その結果ではないのか？二者択一に近い状態で子供たちに選ばせて喜んでいる。どこに創造性の広がりがあるのかな？いずれ宗教も何々コンピューター教になるかな。一足先に進む裕福なシンガポールやアラブ首長国連邦の子供たち大人達はどう感じているのだろう。彼の国の便利さ、都会さだけが強調され報道されるが？

今の社会について行けず、死にたいと言う中高校生がいる。このようないい人達が出ないようにするには、感受性の強いときに自然に対する創意工夫の力を付けねばならないと思うのだがどうであろう。天変地異を生き延び、心のサバイバルを乗り越える事ができる人達とは想像力のある人達であり、田舎育ちの、自然を経験した人達だけのように思える。故に幼少時代の遊びだけでも自然に触れあう遊びが中心で無ければならないと思うのだが。敗戦後に惨めな経験を書いた人達は攻撃を受けた方々、都會人や兵隊さん達で、地方の農漁村の人達は、ちつとも困つていなかつた？のではないか。若者達を兵隊にとられる以外には。でなければあんなに明るい戦後を感じていたのであろうか。開放感だけであつたのであろうか？そんな事を思いながら、自分が過ごした子供の頃の遊びを記してみた。何人かの若い人達がこれを読

み、都会を離れた生活に挑戦する気になつて頂ければありがたい。とにもかくにもソフトウェアを作る連中に洗脳されるなと言いたい。機械は使えるがITには使われるよ！

# 目次

---

目次

まえがき	二頁
一・最初に	
二・学校帰りの途中は	七頁
三・遊び各種	
コマ メンコ（面子） メン棒 将棋やかるた	十三頁
ビー玉 鬼ごっこや馬乗り 風あげ	十六頁
フラフープ・自転車乗り 兵隊蜘蛛の戦い	
四・飼う	
にわとり 捕つたものを飼う	二九頁
五・栽培した物を自分で料理する	一 三六頁
ご飯の釜炊き	
六・捕まえる	
昆虫を デンブン工場とトンボ採り	三九頁
バタリと鳥餅 強い捕り フナ釣り	
ドジョウを捕まえる ザリガニを釣る	
夏の田んぼ 山狩りの探検	
七・作る	
鉄砲いろいろ 糸巻き戦車	五九頁
竹トンボ 釣り竿作り 編む・絢う	
八・採る	
採つて食べる 薬草を採る	六八頁
山菜を採る	
九・祭り	
ヤリカンカー 天神様	七二頁
十・夏休み	
母親の実家に 海水浴・ハマグリを探る	七五頁
シジミ刈り お盆 春休み	
十一・手伝う	
畑作業 田植えの時期に	八二頁
あとがき	
	九十頁



2018 / 07 / 01 CXDWORKS  
非壳品

## 子供の漁・狩猟

<http://p.booklog.jp/book/123112>

著者 : mcxdworks

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/cxdworks/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/123112>

電子書籍プラットフォーム : パブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社トゥ・ディファクト